

フアレン

Hualian

ラスト・シヤーマン外伝

花蓮

長緒 鬼無里

KINASA NAGAO



序章

出会い

ある朝、いつも冷静な父が、珍しく慌てた様子で私の部屋へやってきた。

「花蓮フアイレンすぐ用意しなさい。持っている中で一番上等な衣装を着て。」

「どこかへお出掛けするの？」

深い眠りの世界から突然引きずり出され、私はまだ開ききらない目をこすりながら、父に問いかけた。

「父は今日から、あるお方に学問をお教える役目を命じられた。お前は、そのお方と一緒に勉強したり、遊び相手になって差し上げるんだよ。」

言いながら父は、下女に私の身支度を急ぐよう命じた。私は寝ぼけ顔のまま、女達に囲まれ、あつという間に寝間着をはがされ、かわりに牡丹の刺繍が美しい、桃色の着物を着せられた。そして、一人の下女が靴を履かせる一方で、別の女が私の髪をきつく引つ張り、結い上げた。

やがて父は、身なりが整った私の体を抱い上げ、馬に飛び乗ると、そのまま宮殿に向かって一直線に駆け出した。

私が宮殿に入ったのは、この日が初めてだった。見上げるような重厚な門を抜けると、果てが見えないほどの広場に、たいらに磨き上げられた白い石が敷き詰められていた。父に手をひかれ、刀を腰に下げた男達に睨まれながら、その広場を進んで行くと、奥に巨大な御殿ごてんが見えた。朱に塗られた柱には、金の施ほどこしがなされ、天井に目を向けると、梁はりにまで鳳凰ほうおうの彫り物が

されていた。

御殿ごてんの入口を守る兵に、父が名を告げると、きしむような重々しい音と共に、扉がゆつくりと開かれた。恐る恐る私たち親子が中に入ると、背後で再び扉がきしみ、最後にドーンという大きな音を立てて閉じた。その音に驚き、思わず飛び上がった私が、父を見上げると、その顔は蒼白で、額には汗が滲んでいた。

昼間なのに暗い室内に、目が馴れて来ると、左右に長衣をはおり、冠帽をつけたかつぶく恰幅のいい男達が居並び、私たちに冷ややかな視線を送っているのが見えた。向かい合わせに二列に並ぶ男達の間奥に目を向けると、朱色の柱に囲まれるように、黄金の大きな椅子が置かれていた。そして、そこには五色の宝玉が垂れ下がる冕べん（冠）を被った少年が座り、私の顔を興味深気にじっと見つめていた。

第一章

島国から来た男

「きつといつか、そなたを皇后にする。」

そう言つて、陛下は優しく私の髪を撫でる。その手を両手で包み込み、頬に寄せて私は小さく首を振る。

「私は今のままで十分です。陛下がご無理をおっしゃれば、皇太后様に疎うとまれ、おそばにさえいられなくなりそうで怖いのです。」

それは私の本心だった。たとえ妻と呼ばれず、身を隠さなければならぬような存在であっても、陛下のおそばにいられば私は幸せだった。

「そなたは欲がないな。」

陛下は半分呆れたように優しく笑つて、私の肩を抱き寄せた。

「五年前朕ちんは、まだ子どもで力がなかった。だが、もう成人したのだ。母の好きにはさせない。皇后の亡くなった今、今度こそそなたを妃きにする。」

陛下の言葉は、涙が出るほど嬉しかった。けれど、その思いが深いほど、私の中の不安は大きく膨らんでいった。

「どうか、ご無理をおっしゃらないで…。」

再びそうつぶやく私の唇を、陛下の唇が塞いだ。

十二年前、私は陛下と出会った。その時、陛下は八つ。私は六つだった。学者であった父が

陛下の家庭教師に選ばれ、子どもの少ない宮中で、陛下と共に学び遊ぶ相手として、娘の私が連れて来られたのだ。

陛下はその年、父帝を亡くされ、幼くして魏の皇帝に即位されたばかりだった。だが、幼い私たちに政治の重要性などわかるはずもなく、ただ毎日を宮廷内で楽しく過ごしていた。二人で競い合って論語を暗唱し合ったり、下男を馬にして騎馬戦ごっこをしたり、どんなときもふたりでいた。その頃は、そんな楽しい日々が、ずっと続くものだと思われて疑わなかった。

「朕ちんは花蓮フアーレンを妃きさきにする。」

十二になり、元服された陛下は、少し照れながら私にそう言って下さった。髪を結い上げたばかりの首筋が涼し気で、急に大人びた陛下の顔を見上げ、私は大きく頷いた。多分、この頃にはもう、陛下を愛していたのだと思う。

けれど、それから三年後、十五になった陛下に皇后候補が現れた。皇太后様が、ご自分の息のかかった家の女性との縁談を、独断ですすめられたのだ。その時、陛下は、必死に私を妃にしたいと、皇太后様に訴えかけてくださった。

「あなたも父帝に、愛情により選ばれたのではないですか。なぜ、私が父帝と同じことをしてはならぬのです。」

地方豪族の娘であった皇太后様は、戦乱時兵に召し上げられ、その美貌をかわれて後宮に上がり、先帝の妾めかけになられた。そして、先帝の寵愛ちようあいを一身に受けて、やがて当時の皇后様から、

正妻の座を奪い取られたのだ。しかし、それだけに、成り上がりの強欲さを誰よりも恐れておられる。だから、身分の卑しい私が妃になることを、決して許してはくたさらないのだ。

幼帝であった陛下には、親戚筋である昭伯様（曹爽）と、長年王家に使えてきた仲達様（司馬懿）という二人の後見人がいらした。けれど、仲達様は早くから名誉職に追いやられ、昭伯様が政治の実権を握っておられた。その昭伯様も、数年前、蜀漢討伐に失敗したことで、朝廷内での求心力を失い、当時は実質、皇太后様の天下になっていたのだ。皇帝といえども、まだ成人されていない身では、皇太后様には抗えず、結局、やむなく陛下は、皇太后様が強く推される方を、皇后に迎えられることになったのだった。

皇后様がお興入れされる前夜、私の寝所に陛下は泣きながらいらつしやつた。

「いつか必ず、大人になれば、そなたを妃にする。」

そう言つて、陛下は私の胸で声をあげて泣いて下さつた。私もその髪に頬を寄せ、涙をこぼした。そしてこの夜から、私は陛下の妾になった。

曹家の外戚である名家からいらした甄皇后様は、私と陛下の関係もご存知だった。けれど、宮中でお顔を合わせれば、穏やかな笑顔をいつも送つて下さつた。お体が弱く、よく床に着かれているようで、いつも血の気はなかつたが、優しさがにじみ出るようなお顔をされた、美しい方だった。そんな皇后様を、お体に触るからと理由をつけて寝所に残し、その後も陛下は私

のもとへよく通っていらした。今思えば、この時、皇后様はどんなにお寂しい思いをされていただろう。でも、その頃の私達は、自分たちのことしか、考えられなかった。

「皇后が死んだ…。」

御結婚から五年が過ぎた今年のはじめ、陛下が青い顔をして私の部屋にいらっしやった。急に持病が悪化し、皇后様は十九の若さでお亡くなりになられたのだ。

「朕ちんがそなたを皇后にしたいと強く望んだから…。だから妃きさきは亡くなったのだろうか…。」

罪の意識に苛さいなまれた陛下は、肩を落とされ、両手で顔を覆って涙を流された。私は、そんな陛下の肩を包み込むように抱きしめた。

「…もしもそうであるならば、私も同罪です…。」

私は震える陛下の肩を抱きながら、たとえ天に咎められても、やはりこの方と離れることはできないと思った。そして、その想いは陛下も同じだった。

「今日、例の男がやってきたよ。」

陛下は相変わらず、私の髪を指先に巻き付けるように撫でながら、いつになく楽し気な表情を見せられた。

「例の男？」

「倭国に派遣されていた張政ちやうせいが帰国したんだ。彼が連れてきた倭人の男だよ。」

「祖父が……。ああ、呉が治めていた国の王になりたいとか言っている男ですね。」

張政ちやうせいとは、朝廷の役人をして私の祖父の名で、十年前から、東の海に浮かぶ、倭国という島国に派遣されていた。呉に侵略されていた、倭国の西にある狗奴くなという国を、倭人自身の手で取り戻させることが、祖父に与えられた使命だった。それは、魏からの出兵を最小限に抑え、呉の拠点をも倭人に潰させることを目的としたものだった。私も、祖父がその使命を果たし、帰国に近いことは噂で聞いていた。でも、妾めかけとなった私は家の恥と思われているので、今後とも祖父に会うことはないだろう。

帰国に先立ち、祖父は、呉との戦いに貢献した倭の男を、空席になった狗奴国の王にしたいと、陛下に書状により陳情してきた。それに対して、陛下は、その者の顔を見てから判断するとお答えになったのだ。陛下にとって、遠い島国の、しかもその中の一国の王が、誰がなるうとさして関わりないはずだ。それでもそうお答えになったのは、その者が陛下に年が近い若者で、しかも卑しい身分出身であるということに、少なからず興味を持たれたのだろう。

「その者は、大量の木の札を抱えて来てね。その場でそれに文字を書いて朕ちんによこすんだ。なかなか達筆であったよ。」

「なんと書かれていたのです？」

面白いことをする……と、私も興味を持って、陛下に話の続きをねだった。

「私はまだ魏の言葉が話せません。そのため筆談にて失礼いたします。……と書かれていたよ。」

「読み書きができるのに、言葉が話せないのですか？」

「ああ。ほぼ独学で文字を学んだらしいが、発音の仕方まではわからなかったらしい。」

陛下は珍しく声をあげて、愉快そうに笑った。陛下は日頃、他人にあまり興味を持たれないので、このような様子は久しぶりに見た気がした。

「だから朕も、木札をとって、書いて渡してやった。そなたはなぜゆえ王になりたい？とね。」
「では、なんと？」

私はいつしか、すっかりその異邦人の話に引き込まれ、思わず陛下に答えを急かした。

「うん……。ある人と同じ位置に立ちたい。そう書かれていたよ。真意はよくはわからんが。」
(ある人と同じ位置に立ちたい。)

その言葉に、私の心は釘付けになった。それは、無意識のうちに、私が日頃密かに抱いていた思いと同じだったのだ。

「それからしばらく、その者と文字を書いては、交換し合った。他愛のない話が大半であったが、文字でのやりとりというのが面白く、久々に楽しかった。」

陛下は嬉しそうに微笑んで、枕に顔を埋め、目を閉じられた。じきに寝息をたてはじめたそのこめかみに触れて、私は小さくつぶやいた。

「いつか私も会ってみたいものです。その方に。」

だが、間もなくその異国の男が、誰よりも身近に存在するようになろうとは、この時の私は、想像もできなかった。

それから数日後、陛下は皇后様のお墓参りに出掛けられた。時間を持て余し、書を読んで私のもとに、皇太后様の使いの方がいらつしやつた。使いの方は、皇太后様から直々にお話があると早口に告げ、すぐに身支度するようにおつしやつた。私はなるべく控えめな印象に映るよう、意識して衣装を選び、皇太后様のお部屋に参上した。皇后様がお亡くなりになってから、陛下が私を妻にしたいとおつしやつていることで、お叱りを受けるに違いないと思い、私は重い心と足を引きずつて、皇太后様のお部屋へと向かつた。

皇太后様は、意外に上機嫌な様子で、私をお迎えになられた。先帝の養子である陛下は、この方と血のつながりは無い。年も陛下と十あまりしか離れていないはずだ。先帝が前の皇后に死を賜られたほど、心を惑わされたというその美貌は、今もお変わりなく、周りの者を圧倒するほどだった。惜しみなく金糸の刺繍が施された着物はまばゆいばかりで、耳元では黄金の耳飾りがしゃらしゃらと軽やかな音を立てていた。そんなお姿を前に、控えめというよりみすばらしい自分の姿に気付き、私は居場所の無い、情けない気持ちになった。

「今日は、そなたによい知らせがある。」

真っ赤な紅をひいた口元を扇子で仰ぎ、皇太后様は華やかな笑顔をみせられた。肘掛けに身

を委ね、横たわった姿勢で、皇太后様は扇子を閉じ、それを振って下女に何か指図された。しばらくすると、緊張して座る私の前に、ひとりの男が現れた。上下ともに白一色の役夫（労働者）のような質素な衣を纏い、髪を美豆良みずらに結ったその男は、涼し気な瞳を私に向け、静かに座っていた。

「倭人だが、なかなか美しい男であろう？」

ああ、彼が陛下のおつしやっていた男ね…と、私はすぐに思った。卑しい身分でありながら、ある人と同じ位置に立ちたいと、はるばるこんな異国の地までやってきた男だ。思っていたより若い。陛下よりまだ少し若そうだ。

「今日からこの者がそなたの主人になる。」

「…え…。」

私は思わず目を見開き、皇太后様のお顔を見つめた。皇太后様は、急に眉間に皺を寄せると、扇子で顔を覆われた。

「おお、鈍い娘よのう。そなたの身の上はわらわが買い上げた。そして、この異国からの客人に進呈したのじゃ。」

「そんな…、陛下はご存知で…？」

突然、皇太后様の手から、扇子が投げ放たれ、私の額に当たった。

「思い上がるのもたいがいにおし！妾めかけの分際で皇后になりたいなどもってのほか。次の皇后になるお方なら、もう用意しておるわ。」

しびれる額に触れると、うつすらと血が滲んでいた。

(ああ、まさかこのような手段を選ばれるとは……)

皇太后様は、成人された陛下の妃を独断で決めるのは、さすがに対外的に支障があると考
えになり、私を別の男のものにすることで先手を打たれたのだ。妾など、しよせん立場は奴婢
と同じ。上の方の都合で、簡単に売買されるのだ。おそらく皇太后様の使者が私の実家に赴き、
陛下が私を買い上げた金額以上の条件を指し示されたのだろう。皇太后様からのお申し出とな
れば、家の者も嫌と言えはるはずもない。

(恐れていたことが現実になった……)

だから、これまでのままで良かったのだ。そうすれば、妾としてでも、陛下のおそばに
いることができたのに。陛下が私を皇后にしたいと、強く主張されるほど、皇太后様は遠ざけよう
とされるに違いないと、わかつていたのに……

うつむいて涙をこぼしはじめた私に、皇太后様は勝ち誇ったような表情を浮かべ、唇の端を
引き上げた。

「そなた、実家で使っていた倭人の奴婢から習い、倭言葉を使えるのであろう？代々学問に
長けた家系の出身で、女だてらに教養も深いそうではないか。この者は、この国の学問を少し
でも多く学びたいと考えているようじゃ。そなたほどの適任はいまい？」

とめどなく涙を流す私に、皇太后様は少し面倒そうに顔をしかめ、邪魔者を払うように掌を
振られた。

「話は終わりじゃ。すぐに荷物をまとめて、今の部屋から出てお行き！」

その夜、私は追われるように、数人の下女と荷物を抱え、新しい主人のもとへ生活の場を移した。倭人の男に与えられた建物は、宮廷の北の端に位置し、客人をもてなすには粗末な造りのものだった。それは、彼が小さな島国の、しかもその中の一国の王候補に過ぎず、その上卑しい身分であるがための扱いかと思われた。

皇太后様との面談のあと、私は半日泣き続けたが、もう覚悟を決めることにした。こうなつた以上、運命に身を委ねるしか、ここで生きていく術はないのだから。

新しい部屋に荷物を降ろすと、私は寝衣しんいに着替え、髪を梳き、異国から来た男の寝所へと向かった。覚悟を決めていたはずなのに、男の部屋の灯りが近付くたびに、涙が溢れ出し、頬を濡らした。

「失礼します。」

涙を拭い、私は恐る恐る、寝所の戸口から、倭言葉やまとことばで男に声を掛けた。背を向けて机の上に巻物を広げ、熱心にそれに読み入っていた男は、私の声に驚き、振り返った。

「倭の言葉が話せるのですか？」

「あまりうまくは話せませんが……。」

「まさかここで、言葉の通じる人に会えるとは思いませんでした。」

男は、体ごと私の方へ向き直り、ほっとしたような笑顔を見せた。涼し気な印象だった瞳が、一気に和らぎ、人懐っこそうな表情になった。

「私の名は男鹿おがといいます。」

そう言つて、男鹿おがはそばにあつた木の札に、自分の名を書いて私に手渡した。変わった名だなと思ひながら、私はその札を裏向けて、彼から筆を受け取ると、自分の名を書いて返した。陛下から聞いた、筆談のやり取りの話を思い出し、私は確かに少し楽しいかもしれないと思つた。

「私は花蓮ファイレです。」

聞き取るのが難しかったのか、男鹿おがは私に、再度名を口にするよう求めた。

「花蓮ファイレ。美しい名前ですね。あなたにぴったりだ。」

嫌みのない口ぶりでそう言われ、私の頬は思はず熱くなった。

「…今日、皇太后様は、あなたに何を言われていたのですか？」

急に真剣な表情になつて、彼は私に尋ねてきた。

「…その…怪我は大丈夫ですか？」

押黙つた私の額に視線を移し、男鹿おがは質問を替えてきた。

「ありがとうございます。たいしたことはありません。」

そう言つて、私はそれ以上説明しようとはしなかつた。彼にとつても、他の男の妾めかけであつた女を与えられたなど、知れば面白くないだろう。説明するかわりに、私は自分の腰紐に手をか

けた。陛下以外の男の前で、腰紐を解くのは初めてだった。

「…なにを？」

男鹿は、驚いた表情をしてそう言うと、はだけた私の着物から視線を外した。

「私はあなたのことを、身の回りの世話をしてくれる方だと伺っています。」

「…？つまりそれは、こういうことではありませんか。」

妙なことを言う…と私は、首を傾げた。普通の男なら、そう言われて、言葉通り受け取ることなどありえない。男鹿は、顔を真っ赤にして、きつく目を閉じ、私に背を向けた。

「着物をなおして下さい。私は、あなたには興味が無い。」

そう言われると、私は急に恥ずかしくなって、慌てて着物の襟を合わせ、腰紐をきつく結び直した。

「あなたもそうでしょう。好きでもない男になど、触れられたくはないでしょう。」

袂たもとを握るようにして座り込んだ私に、男鹿は振り返り、優しく笑ってそう言った。もしかして、この人は、私に想い人がいることに気付いているのだろうか。そんなことを思いながら、私はふと、あることを思い出した。

「ある人と同じ位置に立ちたいって…。ある人とは愛している人のことですか？」

私の問いかけに、男鹿の表情が一瞬固まった。その顔を見て、私の疑問は確信に変わった。

「王になって、初めて同じ位置に立てる人って…。あなたの愛する人は…。」

私が推測するよりも早く、男鹿ははつきりとした口調で答えた。

「邪馬台国の女王です。」

「…親魏倭王…？」

あまりのことに、私は言葉を失った。邪馬台国の女王と言えば、倭国内の三十あまりの連合国の頂点に立つ、事実上の倭国の王だ。魏の皇帝もそれを認め、その証として、歴代の女王に親魏倭王の称号と、金印を与えてきたのだ。そんな人物が、なんの身分も持たないこの男の想い人だとは、想像もしなかった。

「今はもう、朝廷が開かれ、帝にその称号は移りましたがね。今でも、あの方が邪馬台国の女王であることは変わりませぬ。私はあの方と同じ未来を歩みたくて、ここまで来たのです。」男鹿は決意を感じさせる目をしていて、その目を見て私は、きつと彼も、女王に愛されているのだらうと思った。その自信が、こんな異国の地に身を置いてまでも、彼を強く支えているに違いないのだ。

「私も同じ。遠すぎる方を愛してしまった…。」

思わず私は、そうつぶやき、無意識に頬を滑り落ちた自分の涙に驚いた。そんな私の顔を、男鹿はじつと見つめていたが、やがてふつと微笑んだ。

「では、私たちは同じ未来を追う同士ですね。」

その言葉に弾かれたように、私は彼の顔を見上げた。燭台の炎が照らし出す彼の瞳は、蜜色に輝き美しかった。こんな澄んだまっすぐな瞳を目にしたのは、生まれて初めてだった。

「あなたを王にして、愛する人のもとへお返ししたい。」

思わず私は、自分の発した言葉に驚いた。でも、この時、本当に心からそう思ったのだ。

「ありがとう。私もあなたの想いを遂げさせて差し上げたい。」

そう言って男^お鹿^がは、屈託の無い笑みを浮かべた。

こうして、この日から、私とこの島国から来た男の運命は絡み始めたのだった。

第二章

疑惑

ある夜、私が男鹿おがの寝所を訪ねると、彼は外廊に立ち、星空に向かって右手の指を立てたり倒したりしながら、しきりに首を傾げていた。

「何をされているのですか？」

背後から問いかけた私の声に、一瞬驚いた表情で彼は振り返った。

「星の位置から地上の地点を読みたいのですが、なかなか正確に測るのが難しくて…。」
「そう言いながら男鹿おがは、再び星空に伸ばした指先を、片目を閉じて見つめた。

「それができれば、海原のただ中を航行できるようになり、航海日数を短縮できるのですが…。」

当時の航海は、位置情報を得る手段が限られているため、沿岸を目で確認しながらすすめられていた。海原で位置を見失えば、遭難に直結する危険があるからだ。そのため、目的地が直線方向に進めば近いとわかっていても、遠回りして陸をなぞるように航行していた。彼はそれを解消するために、星の位置から現在位置を知る方法を模索していたのだ。魏の学者の中でもその理屈は解明されていたが、当時の技術では、時と地点の座標を正確に読むことが難しく、まだ実用化するほどの精度は得られていなかった。

「そういえば、呉との戦いで、蝕しよく（日食）を利用されたそうですね。」

私の言葉に、彼は再び目を丸くして振り返った。

「驚いたな。蝕しよくをご存知なのですか。それとも魏では、すでに誰もが知るような現象なのではないか。」

祖父張政ちやうせいが仕組んだ呉との戦いで、彼の知恵が倭人を勝利に導いたと噂で聞いていた。しかも、武力で戦うのではなく、自然現象への恐怖心を煽ることで、呉の兵を骨抜きにした戦法であったと、当時魏でもちよつとした話題になったのだ。だが、蝕しよくがどのような現象なのか知る者は、この国でもまだ殆どいなかった。

「私の祖父も父も学者でしたので、たまたま幼い頃から耳にしていただけのことです。」

私は、思わず祖父の名を伏せてしまった。彼が祖父と親しくしていたであろうことは想像できたが、祖父の名誉のため、孫が妾めかけに身を落としているなどは知られたくなかったのだ。だが男鹿おがは、そんな私の心内こころうちなど知るはずもなく、目を輝かせてため息混じりに言った。

「すごいな。だからあなたもそんなに聡明なのですね。できれば、あなたの知識を私に伝授していただけませぬか。祖国の発展のために、役立てたいのです。」

彼の意外な反応に、私は頬が熱くなるのを感じ、顔を伏せた。この国では、女が下手に学問について口を出せば、疎ましがられることが多く、こんな尊敬を含んだまなざしを向けられたのは初めてだったのだ。

「倭国で私が師と仰いだ張政様ちやうせいという方も、土木学や、気象学など、多岐に渡って知識の深い素晴らしい方でした。やはり、魏の学問は倭国の遙か先をすすんでいる。」

嬉しそうに祖父のことを語る男鹿おがの顔を見て、私は少し後ろめたい気持ちになった。

その日から私たちは、男鹿の寝所に籠もり、書物を読み合うようになった。私は実家に使いを送り、父からあらゆる分野の学問書を持たせてもらった。それを彼は貪るように読みあさり、解読できない言葉があれば、私に説明を求めた。驚異的な早さで知識を吸収していく彼の問いに答えるため、私も必死に昔読んだ書物を読み返し、改めて学び直す日々が続いた。

「随分その男に入れあげているようね。」

そんなある日、宮廷の庭に腰を降ろし、薬草の名を確認し合う私と男鹿に、皇太后様のおそば付きの女官達が声を掛けてきた。

「噂どおり変わった姿をしている。奴婢を連れているのかと思ったわ。その男が王候補？」

男鹿の全身を品定めするように見つめ、女官達は声をあげて笑った。

「まあ、妾のあなたにはお似合いね。」

「あら、聞こえたら悪いわよ。」

彼女らは、白一色の丈の短い上着を身につけた男鹿を指差して、再びけらけらと笑った。

「大丈夫よ。言葉が通じないんだから。」

そう言っつて、女官達は乾いた笑い声を上げながら、私たちから遠ざかって行った。私は、一度はほっと息をついたが、にわかには悔しさが込み上げてきて拳を固めた。ただ、男鹿に彼女らの言葉が理解できなくて良かったと思った。

「私がこのような姿をしていることで、あなたまで中傷を受けるのですね。」
しばらく黙って、うつむく私を見おろしていた男鹿が、小さくつぶやいた。私は思わず彼の顔を見上げ、息を呑んだ。

「…あなた、言葉…。」

「最近、何となく聞き取れるようになってきました。」

驚く私に、男鹿は照れくさそうに笑った。彼がこの地に来て、まだ半月ほどだ。この間に魏の言葉がある程度聞き取れるようになったなんて、にわかには信じられなかった。呆気にとられる私に、彼は苦笑しながら言った。

「フアイレン花蓮、魏の衣装を用意してもらえませぬか。華美なものはいりませぬ。あなたが恥をかかない程度のものを。」

魏の衣装を纏った男鹿が宮廷内を歩くと、女達が皆振り返った。長身に紺瑠璃こんるりの長衣を羽織り、颯爽と歩く姿は、どこにいても人々の目を惹いた。耳元で美豆良みずらに結っていた髪も、横髪を頭頂部でまとめたことで、美しい輪郭が際立ち、すれ違う女達の視線を奪った。それと同時に、女達の私を見る目は中傷から妬みに変わったが、陛下の妾をしていた頃から、そんなことは馴れっこだった。だからとりあえず、彼が見た目のことで馬鹿にされなくなったことで、私は良しとすることにした。

見た目が変わっても、彼の勉強熱心さに変わりはなかった。私は相変わらず、彼の寢所に籠もり、昼夜書を読み合う日々を続けていた。素直に、祖国のためにあらゆる学問を習得したいという彼の力になりたかったのだ。その後、彼の語学力は飛躍的に上達し、ひと月も経てば、私たちの間で交わす言葉も、ほぼ魏の言葉で成り立つほどになっていた。

そうして一日の大半を共に過ごしても、彼が私に触れてくることは、その後もいつさいなかった。けれど彼の部屋に足しげく通う私を、陛下からあれほど深い寵愛を受けていたにも関わらず、異国の男に心変わりした軽薄な女と噂する者もいたようだ。

陛下が皇后様のお墓参りから、とつくにお戻りになられていることも知っていたが、弁解する機会さえ与えられない私は、どうすることもできなかった。皇太后様は、今回のことについて、ご自分が仕組まれたこととは、決して陛下にはおっしゃらないだろう。留守中突然部屋からいなくなった私を、陛下はどう思われているのだろう。それを思うと、何か恐ろしいことが起こる気がして、私の中で、不安だけが増していった。そしてその不安は、最悪の形で中しってしまった。

「随分、様子が変わったものだな。別人のようだ。」

宮廷の廊下を並んで歩いていたら私と男鹿おがを、背後から聞き覚えのある声が呼び止めた。私たちは立ち止まり、同時に振り返った。するとそこには、恐ろしい形相で彼を睨みつける陛下が

立っていらした。そのお顔を目にして、私は全身に恐怖が走るのを感じた。

「皇帝陛下。お久しぶりでございます。」

男鹿はみぞおちに右手を添え、笑顔を浮かべて魏の言葉で挨拶し、深く頭を下げた。彼は陛下と初対面の時、筆談を楽しんだことを思い出し、自分が憎しみの対象になっているなど、夢にも思っていない様子だった。

「魏の言葉も花蓮から習ったか。」

陛下は奥歯をぎりぎり鳴らせて、ますます憎悪に満ちた表情を浮かべられた。頭を持ち上げた男鹿は、さすがに陛下のただならぬ様子に気が付いたようで、戸惑いの表情を見せた。張りつめた空気の中、私は恐ろしさに身を縮め、生きた心地がしなかった。

突然、陛下は、後ろに控えていた兵士から棍（棒）を強引に奪い取ると、思い切り男鹿の肩に振り下ろされた。そして、肩を手で抑え前のめりに身を屈めた彼の背中に、繰り返し激しく棍が振り下ろされた。やがて、頭や腕、足など、場所を選ばず全身を打ちのめされ、男鹿のこめかみや口からは、血が流れ出した。

「陛下！おやめください！」

私の叫び声も、陛下のお耳には入らないようだった。そこには、両手で頭をかばい、身を丸くする男鹿を、果てなく棍で打ち続ける陛下の恐ろしいお姿があった。

「お願いです！これ以上打てば、死んでしまいます！」

泣き叫ぶ私に気が付かれた陛下は、棍を投げ捨て、今度は私の背を柱に押し付け、首を両手

で締め上げられた。

「そなた、もうこの男に心まで奪われたか！」

首を絞めながら、私を凝視される陛下の目に、涙が溢れていた。私は時折遠退く意識の中、このまま陛下の手に掛かって死ぬるなら、それでもいいと思った。でも、次の瞬間、血を流し、床に倒れた男鹿の姿が目に入り、自分を取り戻した。

（この人を王にして、愛する人のもとへ帰らせてあげなくては……！）

私は陛下の手を掴み、引き離そうと力を込めたが、男の腕力に抗えるはずもなく、再び意識を失いかけた。その時、私の首にかけられていた陛下の手の力が、ふっと軽くなった。

「落ち着いて下さい。我が君。仮にも倭国の帝からその身を預かった者。死なせては、和睦にひびが入ります。」

ふわふわとした意識の中、私が薄目を開けてみると、そこには陛下の手首を握りしめる子元（司馬師）様の姿があった。

寝所に運ばれた男鹿は、それからしばらく気を失ったままだった。体中至る所に青あざができ、こめかみの皮膚ははじけ、右目の瞼は大きく腫れて垂れ下がっていた。私は冷たい水に浸した手拭を、彼の腫れた目元に当てて、涙を流し続けていた。

「……ごめんなさい……。」

うつむいて膝の上で手拭を握る私の手に、そつと痣^{あざ}だらけの大きな手が重なった。顔を上げると、しとねに横になった男鹿^{おが}が、私の手に自分の手を重ねていた。そして彼は腫れた目で私を見つめ、「気にするな」と言うように、その手に力を込めた。

「あなたの想い人は、皇帝陛下ですね。」

「…。」

「多分、私はあのお方からあなたを奪ったのでしよう。」

そう言つて男鹿^{おが}は、痛みに顔を歪めた。心配で思わず身を乗り出した私に、彼は無理に笑つて見せた。

「…でも、なぜ陛下だと？」

私は、自分の想い人が誰なのか、彼に言ったことはなかった。皇太后様と対面した時、彼はまだ私たちの会話を聞き取れなかったはずだ。

「皇太后様が女性にじきじきにお話される内容とすれば、陛下に関わることに違いないと思いました。そしてそのあと、あなたが私に王になりたい理由について訊ねてこられた。私はあの時点で、陛下以外にあの話^{はなし}を誰にもしていませんでした。ですからあなたは、陛下から直接お話を伺える間柄であつたのだらうと思つたのです。」

私は思わず両手で顔を覆い、肩を震わせた。

「ごめんなさい。あなたをこんな目に合わせて…。」

男鹿^{おが}は涙を流す私から、視線を天井に移し、遠くを見つめるような目をした。

「私も、愛する人を奪われかけたことがあります。ですから陛下のお気持ちはよくわかります。私もその時、相手の男を心の底から殺したいと思いましたが。」

当時の気持ちがよみがえったのか、彼は眉を寄せて唇を噛み締めた。同時に彼は、右手で左の胸元の衣を強く握りしめていた。

「…その傷…。」

私は先ほど手当をした時目にした、彼の胸の傷を思い出した。左の鎖骨の少し下のあたりに、比較的新しい、矢が刺さったような傷があったのだ。私の問いかけに、彼は無意識に手を運んでいたらしく、自分の胸元を一瞬見下ろし「ああ」と小さくつぶやいた。そして、改めて愛し気に胸元に手を添え、静かに目を閉じた。

「この傷を負った時、あの方は私を身を呈して守ってくださいました。私は、あの時のあの方のお気持ちに、一生をかけて報いたいです。」

なんて深い愛なんだろう。そう思っただけで私は、ふと我が身を振り返った。私は、はたしてこれほど深く陛下を愛しているのだろうか。そして陛下は、本当に私を愛して下さっているのだろうか。男鹿の話を知っているうちに、私は何を信じればいいのかわからなくなっていた。

「でも、あのご様子では、とても王になることを認めて頂けそうにありませんね。」

自問自答を繰り返す私の膝元で、男鹿は天井を見上げ、深いため息をついた。

それからしばらく、私は男鹿おがのもとに通い、怪我の治療に専念した。彼の傷も随分癒えてきた頃、いつものように彼の寝所に向かう私に、声を掛けて来る者があった。あるお方から伝言を命じられたというその男は、宮廷の端にある書庫へ一人で来るよう、私に伝えた。男は誰に命じられたかは口にしなかったが、私はその主が陛下であると確信していた。なぜならその書庫は、幼い頃から私と陛下の秘密の隠れ家だったのだ。昔はわくわくしながら訪れたその場所に、私は命の危険さえ覚悟して赴いた。他の男のものになった私を、陛下はひどく憎んでおられるはずだから…。

天井近くに小さな窓があるだけの書庫内は昼間でも暗く、古い木と墨の匂いと、かび臭さが充満していた。私は書庫に入り、後ろ手に扉を閉じた。

「…陛下？」

私は小声で呼びかけ、巻物が積み上げられた薄暗い室内を見回し、奥へと歩みをすすめた。次の瞬間、背後から何者かに抱きすくめられた。強く私を抱く震える腕は、昔から体に馴染んだものだった。

「ファイレン
花蓮…。」

私の首筋に顔を埋め、陛下は絞り出すような声でつぶやかれた。

「この前は、そなたにまで手をかけてすまなかった。許してくれ。」

幼い子どもが許しを乞うような、弱々しい声色に、私の中で陛下への愛しさが溢れ出した。私は肩を抱く陛下の手に、自分の手を添え、小さく首を左右に振った。

「だが、あのような野蛮な国の男に、そなたが抱かれているのかと思うと、己を抑えられなかったのだ。」

陛下の声は涙で震え、私を抱く腕には一層力が込められた。

「あの人と私は、陛下が思われているような関係にありませぬ。」

そう言う私の体をご自分の正面に向け、陛下は驚いた表情で私の目を見つめられた。

「あの人は私に触れてきませぬ。祖国に愛する人を残してきていますそうです。」

「…ばかな。そのようなこと、そなたを抱かぬ理由にはならぬだろう。」

陛下の疑問は、もつともだと思つた。私自身も未だに信じられない気持ちなのだ。普通の男なら、想い人がいたとしても、もつと自由に生きている。

「私には興味が無いと言われました。」

苦笑する私に、陛下は信じられないという表情で、首を左右に振られた。けれど、目を逸らさない私に、真実と悟られたのか、陛下は安心されたように、大きくため息をつかれた。そして、再び強く私を抱きしめられた。私も陛下の背に手を回し、懐かしいぬくもりを感じた。

でも、しばらく穏やかな時を噛み締めていた私の体を、陛下が不意に引き離された。

「だが、あの者を信用してはいけない。」

「…?」

陛下は私の両肩を握りしめ、真剣な表情で私を見つめられた。

「やまと倭からの帰国者から情報を集めた。あの男は、さにかわ倭国で審神者を務めていたのだ。」

「審神者…？」

聞き覚えのない言葉に、私は首を傾げた。

「そなたも、つい最近まで、倭国の大王を、巫女と呼ばれる呪術使いの女が務めていたことは、知っているであろう。」

私もそれは知っていた。倭国では、巫女の占いや祈祷によって、国が動かされると聞いて驚いた覚えがある。あの国では、つい最近、帝みかどと呼ばれる君主が誕生し、朝廷が開かれるまで、巫女である女王が受けた神託が全てという政まつりごとが、大真面目に行われていたのだ。それは、神の言葉であるとの大義名分のもとでは、既に決定した事柄も一瞬で覆されるような危うい国政であったと認識していた。

「審神者さきにわとは、その巫女の手先となって、神の言葉を偽り、民を思うままに誘導する男のことでだ。」

「…。」

「だから、あの者を信用するな。奴は言葉巧みに人の心を動かすことに長けている。そなたに手を出さぬのも、我らに気を許させるためかもしれぬ。」

私は、自分で思う以上に男鹿おがの事を信用していたようで、愕然としながら、陛下のお話を聞いていた。だが、同時にどこかで納得している自分もあつた。それは、ずっと疑問に感じていた、身分を持たない彼と女王との接点が、初めて見えたからだつた。

「呪術などまやかしに決まっている。それが民の知るところとなり、女王は退任し、あの者

は身分を失ってこの地へやってきたのだろう。場合によっては、再び民の前に君臨したいと望む女王の差し金で、あの者は王になることを目指しているのかもしれない。」

陛下が呪術者に並々ならぬ嫌悪を抱いておられる訳も、私は知っている。それでも今回のこの推測は、私にも辻褄が合っているように思われた。けれど、私の中には、男鹿おがの事を信じたという思いもわずかながら残っていた。その後、混乱した頭をかかえたまま、陛下と別れた私は、ふらふらとした足取りで、自分の寝所へ向かった。

しばらく自分の部屋で心を落ち着かせてから、私は男鹿おがの寝所を訪れた。部屋の中に目をやると、彼は机の上に巻物を広げ、背を向けて座っていた。

「もう、起きても大丈夫なのですか？」

私が問いかけると、彼は向き直り、いつもの笑顔を見せた。目元には、まだうつすらと青い痣あざが残っていたが、瞼まぶたの腫れは引いていた。

「はい。すっかり。あなたが手当をしてくれたのおかげです。」

屈託なくそう言って笑う彼に、私はいつものように、素直に微笑み返すことはできなかった。

「…聞きたい事があるの。」

私はどうしても真実を確かめたくて、彼に向かい合うように腰を降ろし、その澄んだ瞳を見つめた。いつになく緊張した様子の私に、男鹿おがは一瞬驚いたような表情を見せたが、すぐにため息混じりに笑った。

「なんででしょう？」

ここにきて私はためらい、一旦言葉を飲み込んだ。真実を知りたいと思う一方で、やはりそれを知りたくないという思いがはたらいたのだ。でも私は、再び意を決すると、大きく息を吸い込んだ。

「あなたの愛する女王様は、本当に神の声が聞こえていたのよね？」

答えを聞くのが怖くて、私は思わずきつく目を閉じ、彼の反応を待った。しばらくしても返答がないため、そつと目を開けてその顔を見上げると、彼の顔から笑みは完全に消えていた。私はいたたまれなくなつて、私が望む答えを導きやすいように、訊ね方を変えてみた。

「この国では占いはまやかしのようになつてしまつて、でも、あなたの国では、本当に神の声が聞こえる巫女がいて、その言葉をあなたは民に伝えていたのよね？」

お願いだから「そうだ」と笑つて言つて欲しい。そう願ひながら、私は再度彼の答えを待った。けれど、彼は呆然と私の顔を見つめたままで、その口元からは何の言葉も発せられなかつた。しばらく互いに無言の時間が過ぎ、ふと彼は私から目を逸らすと、絞り出すような声で言つた。

「…あの方には、神の声は聞こえていませんでした…。」

思わず私は両手を口元に当て、叫び出しそうになつた声を呑み込んだ。

「…あなたが、神の言葉を偽つていたというのも、本当なの…？」

意識して落ち着いた声で問いかける私に、彼は少し間を置き、無言で頷くと、大きく肩を落

とした。一瞬の内に、私の中で彼へ対する不信感が大きく膨らんだ。

「あなたは女王の指示で、王になるためここへ来たの？」

「それは違います。あの方は、私がここへ来た本当の目的もご存知ありません。」

男鹿はうなだれていた首を持ち上げ、今度は即答した。まっすぐ私を見つめる瞳が、悲しみの色に染まっていた。

「王になつて、一緒になる約束をして、ここへ来たのではないの？」

私の問いに、彼は目を見開き、言葉を失った。だが次の瞬間、目を伏せて首をもたげると、唇を強く噛み締めた。

「…王になれる確証もないのに、約束などできません。」

「それじゃあ、ただのあなたの思い込みじゃないの。たとえ王になれたとしても、既に彼女が別の人との人生を選んでいたらどうする気なの？」

思わず私が激しい口調でそう言い放つと、男鹿はうつむいたまま、膝ひざの衣ころもを握りしめた。よく見ると、その手は小刻みに震えていた。

「…わかりません。ただ今は、あの方と同じ位置に立ちたいのです…。」

「もういい。あなたの何を信じればいいのか、もうわからない！」

私は叫ぶようにそう言い、彼の寝所をあとにした。一度不信感が芽生えたと、彼の言動のすべてが偽りに思えた。書を読みながら輝かせていた瞳も、優しい笑顔と言葉も、愛する人のことを語る時の澄んだ目も。もしかすると、女王と愛し合っていたという話も、嘘だったのかも

しれない。身分違いの恋に苦しむ私の心を惹き付け、陛下に近付くための…。

悔しさなのか、哀しさなのか、溢れる涙の理由もわからぬまま、私は外廊を駆け抜けた。そして、自分の部屋に飛び込んだ私は、後ろ手に閉めた戸に背を滑らせ、その場にしゃがみ込んだ。

「では、私たちは同じ未来を追う同士ですね。」

初めて会った日に彼が口にした言葉も、今の私には白々しく思われた。なのに、心とは裏腹に、とめどなく溢れ出す涙と、口から漏れる嗚咽に、私の頭はひどく混乱していた。

そして、それ以来、私は彼の部屋に行くことをやめたのだった。

第三章

告白

その後、私と陛下は、人目を忍んで書庫で頻繁に逢うようになった。陛下の遣いの方から知らせを受けると、私は年若い侍女を連れて、書庫へ赴き、彼女に戸口を見張らせた。久しぶりの逢瀬は、内密であることも相まって情熱を燃やし、私たちは激しく愛し合った。

同時に男鹿おがの部屋へ行くことをやめた私を、彼は咎めるどころか、呼び出そうとさえしてこなかった。彼が私と陛下のことに、気が付いているかどうかはわからなかったが、何も言っていない彼に結果的に私は甘えたのだ。当然、同じ屋敷内で生活していれば、偶然顔を合わすこともあったが、そんな時も彼は何事もなかったように軽く会釈して、私の前を通り過ぎて行った。

「呉の孫権そんけんが死んだらしい。」

書庫の薄暗がりの中、壁にもたれかかりながら、陛下はふとそうつぶやかれた。

「皇帝が？」

着物の乱れをなおしながら驚く私に、陛下は哀し気に微笑むと、少し遠くに視線を移された。

「次期皇帝候補の孫亮そんりやうは、まだ十歳だそうだ。」

「…。」

「朕ちんが即位した年と、あまり変わらぬな。」

寂し気な陛下の表情に私はかける言葉を失い、ただそつと寄り添った。

「所詮お飾りの皇帝だ。実権は大將軍の諸葛恪しよかつかくが握るであろうと言われている。」

魏と対立する国のひとつ、呉では、皇太子が若くして亡くなり、その後長年に渡り、二人の皇子に付いたそれぞれの派閥が、権力争いを続けていた。数年前それも、初代皇帝である孫權が両成敗することによってようやく収束したが、結果二人の成人した皇子を失い、新たに立てられたのが、幼い孫亮だったのだ。幼帝に政などできるはずもなく、結局は後見人になる者が実権を握ることになるのだろう。陛下にとつての昭伯様（曹爽）と、仲達様（司馬懿）がそうであったように。

ご自分の境遇に酷似した呉の幼帝に、陛下は同情されているようだった。私は、陛下の肩に寄りかかり、黙ってその手を握りしめた。

「長年続いた権力闘争で、呉の国力は衰退していると聞く。その上、孫權が死に、跡継ぎが年端のいかぬ子どもとなれば、魏にとつてまたとない好機だ。きつと、近く司馬師が動き出すぞ…。」

陛下は私の肩を抱きながら、唇を噛み締められた。

「お待ちください！」

その時、戸口の外から、見張りに立たせていた侍女の、叫びに似た声が飛び込んできた。

「なぜここを開けさせぬ！」

侍女の声のあとに、怒鳴るような男の声が響いた。私たちは慌てて身なりを整え、乱れた髪を頭に撫で付けた。

「陛下！こちらにおいでですわね？」

「…司馬師だ…！」

扉の向こうから呼びかける男の声を聞いて、陛下が声を殺してそうおつしやつた。外から聞こえる野太い男の声は、先ほど陛下が口にされた、撫軍大將軍である子元様（司馬師）のものだったのだ。きつと、しばらく姿の見えない陛下を探して、ここを探し当てられたのだろう。

「ああ！」

突然、侍女の悲鳴とともに、鈍く不快な音が戸口の外から聞こえた。

「花蓮、奥へ隠れろ！」

小声でそう言い、陛下は私の体を部屋の奥へ押しやられた。私は震えながら、巻物の積まれた戸棚の奥に身を隠し、頭を抱えてしやがみ込んだ。それと同時に、木の扉が開け放たれ、眩しい陽の光が、暗い室内に一気に注ぎ込んだ。恐る恐る顔をあげ、棚の隙間から戸口の方へ目を向けると、背中から陽を受け、仁王立ちする恰幅の良い男の影が見えた。そして、その男の足元を見て、私は思わず手で口を覆い、漏れかけた声を抑えた。そこには、私が見張りに立たせた侍女が、うつぶせに血を流して倒れていたのだ。私よりかなり若い、まだ少女である侍女は、主である私を庇って戸を開けることを拒否し、子元様に斬られたのだ。

「陛下、こちらにおられましたか。このようなく所々でいったい何を？」

人を斬った直後とは思えない穏やかな笑みを浮かべ、子元様は戸口近くにおられた陛下に訊ねられた。だが、右手に下げた刀の刃は血に染まり、陽の光に紅く光っていた。

「読み返したい資料があったのだ。そなたこそ何用だ？」

陛下は子元様の進行を妨げるように、彼の正面に立たれ、意識して強い口調でおっしゃった。
「女の匂いがする。」

刀を一振りして血を落とし、鞘に納めると、子元様はそう言って、陛下の肩越しに首を左右に伸ばし、部屋の様子をうかがわれた。私は戸棚の陰で再び身を縮め、息を殺してきつく目を閉じた。

「探せ。」

不意に背後を振り返った子元様は、部屋の奥に向かってあごを上げられた。すると、戸口から武装した兵が数人室内になだれ込んできた。

「何ごとだ！」

叫びにも似た陛下のお声にも耳を貸さず、兵達はどかどかと部屋の奥へ歩みをすすめ、鋭い眼光を四方に巡らせた。私は頭を抱えたまま息を殺し、戸棚の陰でうずくまっていた。

「將軍！おりました！」

間もなく呆気なく見つけられた私は、兵に後ろ手を掴まれ、引きずられるように子元様の前に突き出された。子元様の濃い眉の下の鋭い眼光に捕えられ、私は動けなくなつた。

「これはこれは、倭人の妾ではないか。」

私が陛下の妾であった頃には口にした事がないような蔑んだ口調で、子元様はそう言い、口
の端で笑われた。

「このような汚れた者が、よりもよつて皇帝陛下をたぶらかすとは。」

子元様は私のあごを持ち上げると、冷めた目で見下ろされた。涙を流し、恐怖で腰が抜けそうな私を、兵は締め上げるように乱暴に支えた。

「違う！朕がその者を呼び寄せたのだ！」

必死に食い掛る陛下を無視するように、子元様は兵達に顔を向け、戸口の外を指さされた。

「皇太后様のお部屋へ、その女を連れてゆけ！」

「陛下！」

泣き叫びながら、私は兵に抱えられるように書庫から外へ連れ出された。

「花蓮！」

兵の肩に担がれた私の背後で、涙混じりに叫ばれる陛下の声が、遠くなつていった。

「まったく、なんという汚らわしい娘じゃ。」

後ろ手に縛られ、突き出された私を、皇太后様は汚いものを見るように眉をひそめられた。

「よりもよつて皇帝陛下を惑わすとは……。しかもそなたは、他の男の妾であろう。主人がある身で情事に興じるなど、なんと罪深い。」

そう言つて皇太后様は、扇子で私のあごを持ち上げられた。私は、ひきつけを起こしたように乱れた息づかいで涙を流した。そんな私の顔を見て、皇太后様は扇子をそのまま振り上げ、

横面を思い切りはたかれた。

「花蓮フアイレンは悪くない！朕ちんが……！」

上座に座られた陛下が、腰を持ち上げながら皇太后様に訴えかけられた。直後、そんな陛下の肩を子元しげん様が掴み、席につかれるように促された。陛下は子元しげん様を睨まれ、悔しそうに唇を噛み締められた。けれど強い力に抑えられ、やむなく再び腰を降ろされた。皇太后様は、事情を聞くためとおっしゃって、陛下もこの場にお呼びになられたのだ。

「陛下がこの娘を庇いたいお気持ちはわかりますが、身分を顧みず行つたこの者の罪は、死にも値いたしません。」

「……やめてくれ……。」

「前々からこの娘は、陛下に災いをもたらすと、占いにも出ております。生かしておいては、あなた様にとってよくありません。」

皇太后様に強い口調で言われ、陛下は泣きながら何度も首を左右に振られた。私は半分諦めた気分で、首をうなだれた。確かに、主人のある身で、陛下と逢い引きするなど、命を取られても仕方がない行為であろう。私と陛下は、少し離れた場所で、絶望感に満ちた瞳で見つめ合つた。

「この先にはお通しできません！」

その時、にわかには皇太后様のお部屋の外がざわめき、なにかを制止するような男の声が響い

た。

「なに」といふや！」

ただ事ではない騒ぎに、皇太后様は私から戸口の外へ視線を移され、不機嫌そうに叫ばれた。

「…そなた…。」

そうつぶやき、息を吞まれた皇太后様に、私もゆつくりと顔をあげ、戸口の方へ目を向けた。すると、そこには、険しい表情で皇太后様を見つめて立つ男鹿の姿があった。

「誰か、倭言葉がわからぬか。この者に出て行けと…！」

「通訳は不要でございます。」

苛立ちながら室内を見渡す皇太后様に向かって、男鹿は静かに魏の言葉で言った。

「そなた…言葉を…？」

「私のそば付きの者が捕えられたと聞き、失礼を承知で伺わせていただきました。」

驚かれる皇太后様とは対照的に、男鹿は落ち着いた口調で述べた。

「そなたには関係ない。今すぐここを去られよ。」

皇太后様は扇子を開いて口元を覆い、彼を払うように反対の手を振られた。だが男鹿は、皇太后様の言葉を聞き流し、室内に入ってきて来ると、私の隣でゆつくりと腰を降ろした。

「この者は私の管理下にある者。罪を犯したとなれば、私も監督不行き届きで咎められるべきかと思ひ、まずは事情を聞かせていただきに参りました。」

私は驚きのあまり、まばたきするのも忘れ、彼の横顔を見つめた。彼は見た事がない無機質な表情で、まっすぐ皇太后様を見つめていた。

「いつたい、この者がどのような問題を起こしたというのでしょうか。」

頑かたくな男鹿おがの様子に、皇太后様は観念したように大きいため息をつかれた。そして次の瞬間、何かをひらめいたように目を見開かれ、紅い唇をぐつと引き上げて微笑まれた。

「この者は、そなたという者がありながら、陛下と書庫で逢い引きしておったのじゃ。」

ああ、もうおしまいだ：と私は、再び大きくうなだれた。もしかしたら彼は、私を庇おうとここへ来てくれたのかもしれない。けれど、仮にも彼の妾である私が、不貞をはたらいていたと知れば、さすがの彼も裏切りと感じるに違いない。案の定、男鹿おがは一瞬驚きの表情を浮かべて息を呑んだ。けれど次の瞬間、彼は目を伏せ、ふつとため息混じりに微笑んだ。

「ああ、それなら誤解です。」

肩を落とす私の隣で、男鹿おがは明るい声でそう言った。

「私がこの者を書庫に行かせたのです。ぜひ一読したい書がございましたので、持ってきて欲しいと。」

驚いて思わず顔を上げると、彼は背筋を伸ばし、皇太后様をまっすぐ見つめていた。

「…なに？」

「きつとそこに偶然、陛下がいらしたのでしよう。」

「嘘を言うでない！」

皇太后様は怒りに満ちた表情を男鹿おがに向け、激しく叱責された。すると男鹿おがは、眉間に皺を寄せ、口元を歪ませた。

「自分の妾が不貞を疑われているのに、私に庇う理由があるとお思いですか？真まことであれば、私がこの者を殴り殺しています。ただ、つまらぬ誤解でこの者を失いたくないので、真実を申し上げているだけのこと。それとも、私が嘘を言っているという証拠でもあるとおっしゃるのですか？」

澀むむ事なく淡々と話す男鹿おがに、皇太后様は言葉を失い、悔しそうに唇を噛み締められた。

「この者を捕えた時、陛下はご自分がこの者を呼び寄せたとおっしゃったのだぞ。」

皇太后様に加勢するように、それまで黙って陛下の傍らに座っておられた子元しげん様が、男鹿おがを睨みつけながらそうおっしゃった。それを聞いて彼は、再び笑みを浮かべ、ため息をついた。

「それは陛下のお優しいお気持ちの表れでしょう。このような場合、身分の低い者が罪に問われることが世の常。ですから咄嗟にご自分が呼び寄せたことにして、この者の罪を軽くしてやろうとそうおっしゃったのでしよう。陛下とこの者の以前の関係を考えれば、そう思われても不思議ではありません。責められるとすれば、あのような場所に、女性だけを向かわせた私の方でしょう。」

そう言つて、男鹿おがは上半身を深く折り曲げ、両手と額を床に付けた。

「たわけたことを……」

見慣れない倭国風の辞儀に、子元しげん様は戸惑い、悔しそうに舌打ちをされた。しばらくして体

勢を戻した男鹿は、今度はそんな子元様の方へ向き直った。

「それより子元様、あなた様がこの者の侍女を斬られたとか。この件が誤解であれば、あなた様は、罪の無い少女を傷つけられたことになります。」

微かに侮辱を滲ませた視線で、男鹿は子元様を見つめた。

「私を脅すつもりか！」

子元様は思わず怒りの表情を浮かべて彼を凝視し、腰の刀の柄を握りしめられた。一気に室内に緊張感がはしった。

「とんでもない。幸い彼女は命を取り留めましたので、我々も事を荒立てるつもりはありません。せぬ。ただ、年頃の娘の体に、生涯消えない醜い傷が刻まれたのです。せめて、誤解された主人を守ろうとして負った、名誉の負傷であったと慰めてやりたいのです。」

哀し気な瞳で訴えかける男鹿に、いつしか形勢は逆転し、なぜか子元様の方が責められているように、私たちの目にも映るようになっていた。皇太后様も、子元様も、もう出てくる言葉は無く、お二人とも固く口をつぐんで、異国から来た男を睨みつけていた。

(やつぱり、とんでもない嘘つきだわ。)

助けてもらっておきながら、私は男鹿の涼し気な横顔を見つめてそう思った。

「おわかりいただけただけのならば、この者を連れて帰ります。」

男鹿はそう言って皇太后様に向かって深く頭を下げると、立ち上がりながら私に「行きましよう。」と声を掛けた。そして私の手を縛る縄に目をとめた彼は、再び子元様の顔をじっと見つ

めた。

「ほどいてやれ。」

彼の意向を読み取った子元様は、悔しそうに歯ぎしりして、近くの兵に吐き捨てるようにおっしゃった。兵は戸惑いながら、私に近付き、縄を小刀で切り落とした。手が自由になると、私は慌てて立ち上がり、男鹿の背を追った。けれどふと背後に視線を感じた私は、振り返り、上座におられる陛下の顔に視線を向けた。陛下は複雑そうな表情を浮かべておられたが、すぐに「早く行け。」と、手のひらを前後に振られた。それを見て私は頷き、再び男鹿のあとを追った。

「待って！」

早足で歩く男鹿の後を、小走りするように追っていた私は、息苦しさに足を止め、彼を呼び止めた。宮殿から少し離れた庭園を歩いていた彼は、私の呼びかけに立ち止まり、冷めた表情で振り返った。私はその顔を見上げながら、膝に置いた手で上半身を支え、乱れた呼吸を整えた。

「…なぜ責めないの？私にはあなたを裏切っていたのよ。」

一瞬表情を曇らせた男鹿は、次の瞬間ほっと息をついて微笑んだ。

「あなたは望んで私の妾になつたのではないし、私もそれを望んだわけではない。それに愛する人と共にいたいと思うのは、自然な感情でしょう。それを私は責めるつもりはない。」

寛容な彼の言葉も、この時の私には偽善に聞こえた。そして、穏やかに微笑む彼の顔を見て

いると、なぜか例えようのない苛立ちが胸の中に沸き上がった。

「あなたがとんでもない嘘つきだってことは、よくわかったわ。」

思わず私は、苛立ちがむき出しの言葉を彼にぶつけた。

「これで恩を売ったと思わないで。陛下のおそばにいられないくらいなら、私は命を失つても良かったんだから……！」

吐き捨てるような私の言葉に、男鹿は突然血相を変え、掌を大きく振り上げた。

(ぶたれる！)

一瞬そう感じた私はきつく目を閉じ、肩をすぼめて身構えた。衝撃がないまましばらく経ち、そつと目を開けた私の前には、振り上げた震える右手を握りしめ、目を伏せる男鹿がいた。やがて、その手を下ろした彼は、深くため息をついた。

「陛下は、ご自分が呼び出したのだと言って、あなたを庇われたのでしょう？それはあの方が、あなたを失いたくないと思っただけでいらつしやる証。私の事は、どれだけ蔑んでもらっても構わない。けれど、陛下にとつて大切なその命を、どうか粗末にしないで下さい。」

噛み締めるようにそう言い、男鹿は再び背を向けて歩きだした。

男鹿と別れ、自分の部屋へ帰り着いた私は、肘掛けに身を委ねて大きくため息をついた。この数時間の出来事を思い返すと、様々な想いが渦巻き、私はしばしの間呆然と天井を見つめ続けていた。

ふと、傷を負った侍女の容態が気になり、立ち上がりかけた私の前に、一人の老人が現れた。

「どちら様ですか？」

首を傾げる私に、老人は胸まである白髪混じりのあご髭をなで、微笑みながら近付いて来た。

「久しぶりじゃのう、花蓮^{フアイレン}。随分大きくなつたものじゃ。」

「…お爺様…？」

まなざしが父に似たその老人は、倭国に渡つて以来、十年振りに会う祖父、張政^{ちやうせい}だった。

「なぜ、このようなところにお爺様が…。」

役人である祖父にとつて、妾に身を落とした私は恥であるはず。できれば距離を置きたい存在であろうに、わざわざ出向いて来るなんて…と、私は不思議に思い、問いかけた。

「私の身の上はご存知なのでしょう？」

「どのような身分であれ、人を愛する気持ちは尊いものじゃよ。」

祖父は優しい微笑みを浮かべながら、私に向かい合うように腰を降ろした。その表情と言葉に、私は驚き、目を見開いた。

「お爺様がそのようなことをおっしゃるとは、思いませんでした…。」

最後に祖父に会つた時、私はまだ幼く、姿形はうろ覚えだった。でも、役人であり、学者である祖父には、切れ者で融通の利かない堅物という印象を持っていた。役人家業を嫌い、学者に徹した父も、そんな祖父を尊敬する反面、恐れていたように思われた。だが今、目の前で穏

やかに微笑む老人は、私の中で思い描いていた祖父像とはまるで別人だった。

「わしも倭人と関わって、角かどがとれたかのう。」

そう言って祖父は、今度は声をあげて笑った。

「特にあやつ、男鹿おがに会ってからは、世の中を見る目が変わった。」

祖父の口から、男鹿おがの名が出て、私は一気に胸が詰まり、眉間に皺を寄せた。

「あの人は嘘つきです。倭国では、神の言葉を偽っていたのでしょう？さつきだつて…。」

口を尖らせて、床に目を向けた私に、祖父は一瞬押黙ったが、ひとときしてふつとため息をついた。

「あの者は確かに時折嘘をつく。じゃが、あの者が偽りを口にするのは、誰かを守りたい時じゃ。」

「…。」

思わず顔をあげた私を、祖父の細い目が待ち構えていた。その時、その目から笑みは消えていた。

「あの者が審神者さきにわであつたことは、知っているようじゃな。」

祖父の問いかけに、私は黙って頷いた。

「邪馬台国の女王である巫女に、神の声が聞こえなかつた事も…？」

私が再び頷くと、祖父は大きく息を吐き出し、肩をすぼめた。

「己が可愛ければ、まずそこで嘯うそくとは思わぬか？」

「…。」

「相変わらず不器用な奴じゃ。」

そう言つて祖父は、眉を八の字に下げて微笑んだ。

「邪馬台国の女大王ひめのおおきみ壹与いよ様は、即位された時、まだ十三歳の少女じゃった。」
それから祖父は、静かに語りはじめた。

邪馬台国の女王卑弥呼様の死後、継承順第一位であつた皇子月読つくよみ様は、身内の策略にはまり国を追われた。その時、彼の姪である壹与いよ様は、女王となつて国を守ることを決意されたのだという。優れた巫女であつた彼女は、それまでも神託を授かり、実質的に国政を担つていたため、当初は大きな不安は感じておられなかつたようだ。

だが、当時彼女は月読つくよみ様に恋をされていた。無自覚の間は良かったが、その想いに気付かれた時、彼女には神託が聞こえなくなつてしまった。巫女とは、身も心も神に捧げなくては、靈力を失い、神の声が聞こえなくなるものらしいのだ。その頃の倭国では、神託が社会構造の中心にあり、その全責任は巫女に集中していた。政まつりごとも、農作物の出来具合も、天災時も、人は神に教えを乞い、すがつて生きていたのだ。祖父に言わせると、当時の倭人にとつて神託に頼らずに生きるということは、目を塞いで切り立った崖の上を歩くような、計り知れないほどの恐怖であつたという。しかも邪馬台国は、三十もの連合国を束ねる倭国最大の国だ。靈力を失つたわずか十三歳の少女の肩に、大きすぎる責任がのしかかり、彼女の精神は崩壊しかかつてい

たらしい。

「そこで、わしは皇族の下働きをしていた男鹿おがに目を付けたのじゃ。あの者が、幼い頃から密かに壹い与よ様を慕っている事を、人伝ひとつたえに聞いておったからのう。」

祖父は眉を寄せて、唇を噛み締め、一旦言葉を呑み込んだ。

「国と女王を守るには、神託に変わって、魏の学問を政まつりごとに取り入れるしかない。しかし、倭人に人の声は届かぬ。彼らにとつては、神の言葉だけが絶対であったのじゃ。だから、わしはあの者に言った。おぬしが審神者さきにわとなり、神託であるとして民に助言し、この国を導けと。」

思わず私は、両手で口を塞ぎ、嗚咽おえつを堪こらえた。

「それをあの者は受け入れた。倭人にとつて、神の言葉を騙かたるなど、いずれ地獄に落ちることも覚悟するような背徳行為じゃ。じゃが奴は、国のため、壹い与よ様をお支えするため、そうすることを決めたのじゃ。彼女が自分以外の人を想い、靈力を失ったことを承知の上で。」

私は肘掛けに顔を埋め、堪えきれず声をあげて泣いた。そんな私を、祖父は黙って見守ってくれていた。

「…そして、いつしか彼女も、彼を愛するようになったのですね。」

しばらくして、ようやく言葉を口に出せるようになった私は、祖父に問いかけた。祖父は大きく頷き、少し遠くを見るように視線を移した。

「壹い与よ様のお気持ちに応えるために、あの者はこんな遠い異国の地までやってきたのじゃ。下衆の身では到底手の届かない女王と、同じ位置に立つたために。」

「ある人と同じ位置に立ちたい。」

あの言葉の真意は、これだったんだ。私は居ても立ってもいられなくなり、部屋を飛び出すと、男鹿おがの寝所に向かつて駆け出した。新緑の眩しい庭園の中の外廊を駆け抜け、奥まった場所にある部屋へ飛び込むと、いつものように彼は背を向けて書に読みふけていた。気配を感じ振り返った彼は、立ち尽くしたまま、激しく息をつく私の顔を少し驚いた表情で見上げた。

「…張政ちやうせいは…私の祖父なの…。」

息を切らしながら絞り出すように言う私に、彼はふつとため息をついた。

「知っています。でも、それを聞いたときは驚きました。あなたが張政ちやうせい様の孫娘まごだったなんて。どおりで賢いはずだ。」

そう言つて男鹿おがは、出会った頃と変わらない人懐っこい笑顔を浮かべた。その顔に、私は今まで陛下には感じたことのない、胸を締め付けられるような感情を抱いた。

「祖父に聞いたわ。壹い与よ様のこと。…あなたのこと…。」

再び真顔に戻った彼は、少し寂し気に目を伏せた。

「ごめんなさい。私、あなたにひどいことを言ってしまったわ。」

私の涙声に気が付いた彼は顔をあげ、せつな気に微笑んだ。

「あやまることはない。私が神の言葉を偽っていたことは事実ですから。」

彼の言葉を聞いて、咄嗟に私は自分でも思いも寄らない行動に出ていた。机に背を向けて座る男鹿の胸に飛び込むと、両手でその背中を強く抱きしめたのだ。勢いで仰向けに倒れた男鹿の肩が机に当たり、積まれていた巻物が、床に落ちて四方に転がった。

「…花蓮？」

男鹿は上半身を起こしながら、戸惑いの声をあげた。その声を遮るように、私は彼の口を唇で塞いだ。

「よせ！」

男鹿は顔を背けて唇を離し、そう叫んだ。我に返った私は床に手をつき、息の乱れる彼の横顔を、呆然と見つめた。

「今、初めてわかったの。愛するって気持ちが…。」

言いながら私は、自分の頬を流れる涙のとめどなきに驚いていた。

「ずっと、陛下のことを愛していると思っていた。でも、こんな感情を、今まで誰にも感じたことはなかった…。」

初めて言葉を交わした時から、心の底では予感していた。彼が愛する人への想いを語った時、共に書を読んで過ごした日々、その時々、私は例えようのないせつなさを感じていた。だから、陛下に殴られる男鹿を守りたいと思ったし、彼の偽りの過去を知った時、激しく動揺したのだ。再び陛下と会うようになって、男鹿への想いは錯覚だったのだと自分を欺きかけた。でも、皇太后様のお部屋へ現れた彼の姿を見た時、確かに私の心は震えたのだ。絶望的な状況の中、そ

の震えを起こさせた感情は、喜びだった。そして、祖父から真実を聞き、彼の女王へ対する絶
対的な愛情の深さを知った上でも、溢れる感情を抑えることはできなかった。

「私、あなたを愛してる。あなたの心が、決して私のものにならないことはわかってる。で
も好きなの！」

うなだれて泣きながら、私は彼が困惑していることを感じとっていた。伏し目がちに彼の手
元を見ると、握られた拳が小さく震えていた。

「気持ちはありませんか？」

随分時間が経って、彼は絞り出すように言った。

「でも、私はあなたの気持ちに応えられない。」

そう言って、彼は立ち上がり、部屋から出て行った。残された私は、散らばる巻物に囲まれ、
突っ伏して泣いた。

「…わかってる…。」

私は、自分自身に言い聞かせるように、何度もそうつぶやいた。今はただ、微かに墨の匂い
が漂うこの部屋で、気が済むまで泣き続けていたかった。

第四章

泥に咲く花

それからしばらく時間が過ぎ、季節は夏を迎えていた。

自分の想いを告白してから、気まずさを感じた私は、相変わらず男鹿の部屋から遠ざかり続けていた。私が陛下と書庫で会うようになった頃から、祖父張政ちやうせいが勉強に付き合うようになっていたようで、その点においても私は彼から必要とされていなかっただ。特にする事もなく、無気力に過ごす日々であったが、時折庭園越しに外廊を歩く彼の姿を見かけると、ときめきとせつなさが一気に押し寄せ、私の心を締め付けた。

そんなある日、思いがけず、男鹿おがの方から私の部屋を訪ねて来た。彼も気まずさを感じているようで、私たちは向かい合って座ったものの、互いに視線を逸らし、しばらく無言の時を過ごした。

「…今朝、皇帝陛下の遣いの方がいらつしやいました。」

あいかわらず、視線を逸らしたまま、ようやく彼は用件を話しはじめた。私は床を見つめたまま、こくりと小さく頷いた。

「あなたを再び、妾としてお迎えしたいそうです。」

その言葉に私が思わず顔を上げると、彼は言いにくそうに話を続けた。

「新しく皇后様を迎えられることを条件に、皇太后様からお許しをいただいたそうです。」

「…行くわ。」

私の答えが意外だったのか、彼は目を大きく見開いた。

「…よろしいのですか？」

そう言つて向けられた、同情するような彼の瞳に、私は激しい苛立ちを感じた。

「ずるいこと言わないで。あなたは私を愛せないくせに。」

「…。」

乱暴に投げつけられた私の言葉に、彼は再び視線をずらし、言葉を失った。

「陛下はあなた達のように、きれいな水の中にいらつしやらないの。いつ足元をすくわれるとも知れない泥沼の中を、幼い頃から歩いていらつしやるのよ。あのお方が道連れを必要とされているのなら、私は喜んで参ります。」

強い口調で私がそう言うと、彼はうつむいて目をきつく閉じ、唇を噛み締めた。そして、私に向かつて一礼すると、黙つて部屋を出て行つた。

間もなく皇帝陛下は、皇后様を迎えられた。新しくいらした皇后様は、役人である張緝ちやうしやく様の娘で、まだあどけなさが残る可愛らしい方だった。張緝ちやうしやく様は、先帝に政治の才を認められ、その頃から皇太后様とも深いつながりのあつた方だ。だからこそ、皇太后様はその娘を妃に選ばれたのだらう。皇太后様の計らいか、張皇后様がお興入れされると、同時に張緝ちやうしやく様も光祿大夫こうろくたいふに特進された。

再び陛下の妾に召された私は、宮中のもといた部屋へ戻った。男鹿^{おが}の屋敷の粗末さに馴れつつあった私は、久しぶりに目にした贅を極めた部屋の装飾にしばらく落ち着けなかった。そんな落ち着きのなさも薄らいで来たある夜、陛下が初めて私の部屋へいらっしやった。

「やはり、この部屋でそなたの顔を見ると落ち着く。」

陛下はそう言つて、両手で私の体を包み込まれた。私もそんな陛下の背中を、ぎゅつと抱きしめた。男鹿^{おが}へ対する想いとは明らかに違つたが、陛下へ感じる想いも、間違いなく愛しさだった。それから私たちは、感情のままに愛し合つた。

「今回も、そなたを皇后にすることは叶わなかつた。」

しとねに仰向けに横たわり、陛下は悔し気につぶやかれた。

「こうして再び、おそばにいられるようになれただけで、私は満足です。」

衣の上からはそうは見えない逞しい胸元に顔を寄せ、私は陛下の横顔を見上げた。陛下はそんな私の肩を抱き寄せ、泣き出しそうな表情を浮かべて話を続けられた。

「…実は、母上に、皇后を娶らねば、そなたが命を落とすと占いに出了たと脅されたのだ。」

「占い…。」

陛下が呪術を嫌悪されている理由はここにある。皇太后様は、呪術使いなのだ。そしてその占い結果を利用して、言葉巧みに人々を操る能力に長けておられる。

「あの女の占いがまやかしなのはわかっている。けれど従わなければ、占いに託^{かこ}けつけて、

そなたを殺すだろう。」

陛下は私の命を守るために、皇后様を迎えられることを承諾されたのだ。私はたまらない気持ちになって、陛下にしがみついた。

「陛下にとって大切なその命を、どうか粗末にしないで下さい。」

その時突然、以前男鹿おがに言われた言葉が脳裏によみがえった。同時に浮かんだ彼の面影を振り払うように、私は首を左右に振った。そんな私の様子に、陛下は何かを感じられたようだった。

「…そなた、あの倭国の男を愛しているだろう。」

陛下が発せられた言葉に、私は目を見開き、息を呑んだ。

「母上の部屋にあの男が現れてから、そなたの目はあやつしか追っていないなかった。」

私は、急に震え出した全身を抑えようと、自分自身を強く抱きしめた。けれど、落ち着こうとすればするほど、震えは大きくなり、目から涙が溢れ出した。すると陛下は、私の体を仰向けに床とこに転がすと、覆い被さり、両手をおさえて自由を奪われた。そして、私を凝視するその目は、涙に潤んでいた。

「それでもいい。そなただけは朕ちんのそばにいてくれ。」

そう言つて陛下は崩れ落ちるように、私の胸に顔を埋められた。幼子のように泣く陛下の頭

を、私は強く抱きしめた。仲達様（司馬懿）の亡くなられた今、このお方には、もう私しかないのだ。

「私はずっと、陛下のおそばにおります。」

それから私たちは、いたわり合うように、いつまでも泣きながら抱きしめ合った。

わずか八歳で皇帝に即位されてから、常に仲達様だけが陛下の味方だった。身内同士で権力争いに明け暮れる曹家の人々は、幼い陛下を利用し、私欲を満たすことばかり考えていたが、仲達様は、先帝に恩義を感じ、真に魏の国の行く末を憂いておられた。そのため陛下は、親戚である昭伯様（曹爽）よりも、仲達様にこの国の未来を託すべきだとお考えになられたのだ。そして、だからこそ二年前、仲達様に協力して、曹家を朝廷から一掃し、司馬家に実権を握らせたのだった。

でも、その仲達様が、昨年病で急死され、意志を継いで下さると信じていた長子の子元様（司馬師）が、あろうことか皇太后様の傀儡となっていた。皇太后様に唆され、子元様は最近では、皇位をも奪おうと真剣に画策されているようだ。日に日にそれは、陛下へ対する態度にも顕著に現れ始めており、気を抜けば皇位のみならず、命さえいつ奪われるかしのれない状況なのだ。

信頼していた仲達様を失い、誰一人味方のいない陛下は、今、たったお一人で、どこから斬

りつけられるかもしれない恐怖に怯えながら、玉座に座っておられる。そんな陛下から離れることなど、私には、はじめからできるはずがなかった。

男鹿^{おが}に出会って、一瞬澄んだ水の中を泳ぐ、美しい魚に目を奪われかけたけれど、やはり私の居場所は、陛下のおられるこの泥沼の中なのだ。

「あの人と私では、住む世界が違い過ぎます。私のいるべき場所は、陛下のいらつしやるここにしかありません。」

これは愛ではなく、依存と言うのかもしれない。でも、間違いなく、陛下は私を必要とされているし、そんな陛下を私はお支えしたいと思っている。

同時に、私に関わることで男鹿^{おが}の周りの澄んだ水を、醜く濁したくないとも思った。あの人には、純粹に人を愛し、信じる心を持ったまま、母国に帰って欲しい。だからきつと私は、こうして再び陛下の妾に戻れて良かったのだ。

とめどなく涙を流し続ける私の額に、陛下は口づけし、優しく抱きしめてくださった。

「…ありがとう。…花蓮^{フアイレン}。」

私も強く陛下の体を抱きしめた。この時の私の心は、唯一、陛下の肌のぬくもりに救われていた。

ある朝、年若い侍女が、頬を紅潮させて、私の部屋へやってきた。

「奥様、北の池に蓮が咲きました。見に行かれませんか？」

この侍女は、先日書庫で私を庇い、子元様に斬られた娘だった。肩から背中にかけて深い傷を負ったが、思ったより回復が早く、最近仕事にも復帰したのだ。突然の申し出に、私が戸惑いながら頷くと、彼女は急かすように手招きした。

「あまり激しく動くと傷が開くわよ。紅玉。」

「早く、早く」と手を振りながら外廊を駆けて行く彼女を、私は笑いながら追った。いつも艶やかな赤い頬をしてる彼女を、私は紅玉と呼んでいた。

「紅玉待って！」

呼び止めようとそう叫んだ瞬間、宮廷の片隅にある池の情景が、目の前に広がった。木々に覆われたその小さな沼池には、薄紅色の蓮の花が無数に咲いていた。うっそうと薄暗くさえあるその場所で、水面を覆う花々は汚れなく輝いて見えた。私はしばし、その美しさに目を奪われ、その場に立ち尽くした。

しばらくして、ようやく周りを見渡す余裕を取り戻すと、少し離れた池の端で、紅玉が楽し気に誰かと話す姿があった。私に気付いた彼女が、大きく手を振ると、その人物も振り返った。

「…男鹿…」

私に気が付いた彼は、静かに頭を下げた。

「随分回復したようですね。」

池の縁を踊るように歩いて行く紅玉こうぎよくの姿を目で追って、男鹿おがは安心したように微笑んだ。

「傷を負った直後、あなたが薬を調合して、治療してくれたみたいね。適切な処置だったと、医者も感心していたわ。」

「みんな、あなたが教えてくれたことです。」

彼の言葉に、私は黙り込んだ。そして私たちは、沈黙を保ったまま、池を見渡せる石造りの椅子に並んで座った。

「…張政様ちやうせいから聞きました。陛下の置かれている状況と、あなた方のこれまでのご関係を。」池に目を向け、彼は静かに語りだした。

「じゃあ、わかったでしょ。私たちはこれまで、覇権争いという泥沼の中を、足をとられないように、支え合いながら生きて来たのよ。そして、それはこれからもそうなのよ。」

そう言っただけは、哀しいくらいに美しく咲く花々を見つめた。

「蓮の根は、泥の中に埋もれているそうですね。」

ふと、男鹿おががつぶやくように言った。

「あなたもそうだ。泥の中にあつたとしても、その心はあの花のように、気高く美しい。」

思わず私は、顔を伏せ、溢れる涙を彼に悟られまいとした。

「男としてはあなたに寄り添えないが、私にできることがあるば、いつでも頼ってきて下さい。」

一見優しいけれど、絶望的な言葉を彼は口にしました。でも、そこがとても彼らしいと思った。ゆつくりと立ち上がった彼は、池の向こう岸を歩く紅玉こうぎよくに向かって、大きく手を振った。それを見て、少女は遠目にも赤い頬を一層赤くして、全速力でこちらに向かって駆け出した。

「また一人、泣かせそうね。」

「…？」

言葉の意味が分からないのか、男鹿おがは軽く眉を寄せて首を傾げた。本当にこの人は、自分の魅力に気付いていないのかしらと、私は呆れて涙混じりに笑った。

「女に期待を持たせないとところが、唯一の救いだわ。でも、壹いよ与よ様には、待つて欲しいって、言つてあげてもよかつたんじゃない？」

私がそう言うと、彼は目を見開いて、驚きの表情を浮かべた。

「倭国くくにを出る前、友人にも似たようなことを言われました。時には、希望を持たせてやるのも優しさだろうと。」

頭を掻きながら、彼は顔を赤らめた。

「その友人の方が、女心がよくわかつているみたいね。もしかしてその人も、壹いよ与よ様のことが好きだったりして…。」

冗談混じりに私がそう言って笑うと、彼の手が止まり、一瞬で顔から色が消えた。

（あらあら、冗談じゃ済まなかつたみたいね。）

珍しく動揺した彼の顔を見て、私は苦笑した。

「男鹿様、明日の朝もこちらにいらつしやいますか？」

その時、息を切らせて駆けて来た紅玉が、輝く目で男鹿を見上げた。その瞳は、やはり恋する少女のものだった。

「早起きできたらね。」

彼はそう言つて優しく微笑んだ。それを聞いて、紅玉は飛び上がるようにして喜び、私の方へ振り返つた。

「奥様、蓮が咲いている間、毎日こちらへ来ましょうよ。」

一層目を輝かせる紅玉に、私は小さく左右に首を振つた。

「私は遠慮しておくわ。いらぬ誤解をされては、彼に迷惑をかけるから。花が見たければ、あなただけで来ればいいわ。」

私の返答に、紅玉は戸惑いの表情を浮かべた。主人に合わせるべきか、彼に会いたいという気持ちを優先するか、一瞬悩んだのだろう。

(初めて恋する相手にしては、かなり難関よ。)

私は心の中でそうつぶやき、蓮の咲き乱れる池をあとにした。

第五章

覚悟

あつという間に夏が過ぎ、秋が深まるにつれ、子元様を中心、朝廷内がざわめきはじめた。呉の皇帝に、わずか十歳の孫亮が即位したことで、敵の内政が晩弱な今こそ、攻撃する好機と
の声が高まりつつあったのだ。

そのような空気の中、張皇后様の父である張緝様は、兵の準備が不十分であるとして、年内の攻撃に反対されていた。しかし、普段冷静な子元様が、今回はいつになく事を急いでおられる様子で、早々の出兵を主張され、両者の意見は、どこまでいつてもまとまりそうになかった。

「そなたはどう思う？」

しとねの中で、重いため息をつきながら、陛下は私に意見を求められた。陛下はここ数日、張緝様と子元様の兩人から、呉の要所である東興への侵攻に際し、詔勅を迫られ、頭を抱える日々を送っておられたのだ。

「東興の砦は長江の水路に高くそびえ立つと聞きます。呉の兵は水上の戦いに慣れておりませんが、我が軍は不慣れです。大夫（張緝）様のおっしゃられるとおり、もう少し準備に時間をかけられた方がよろしいのでは……」

私がそう答えると、陛下は再び大きなため息をつかれた。

「朕もそう思う。だが時が経てば、それだけ呉に猶予を与えることにもなるという、司馬師（子元）の言い分もわからなくはないんだ。兵の数だけで言えば、こちらの方が圧倒的に勝つ

ていることだしな。」

「…確かに…。」

陛下の言葉に私は自信を失い、口ごもってしまった。今回の侵攻に、どれほどの兵が派遣されるのかはまだわからないが、おそらく数十万の兵が敵地で戦うことになるのだろう。陛下の判断によつては、犠牲者の数が大きく変動し、死者が数万人か、それ以上にのぼることも考えられる。以前ならこのような時は、仲達様ちゆうたつが適切な助言をして下さった。しかし今の陛下には、頼りになる方もなく、重大な決断をおひとりでくださなくてはならないのだ。それが、どれほどの覚悟が必要なことなのか、私には慮おもんばかることしかできなかつた。

「戦が始まれば、諸外国への行き来もままならなくなりますね。」

思わず口から出た言葉を閉じ込めるように、私は慌てて口元を手でおさえた。そして、陛下がこんなに苦しんでおられる時に、なんてことを口にしてしているのだと自分を責めた。でも、勘のよい陛下は、私の言葉に隠された意図に既に気付いていらした。

「戦が始まる前に、あの男を倭国くくにに帰せと言うのか？」

「…。」

心を読まれ、私はきつく目を閉じ、身を縮めた。戦が始まると、混乱に乗じて各地の治安が悪化し、倭国へ渡る事もままならなくなる恐れがある。その前に、男鹿おがを帰国させてやりたいとの思いが、つい口から出てしまったのだ。しかし、重大な決断を迫られ、苦しんでおられる陛下の前で、そんなことを口にするには、あまりに無神経だったと、私は自分の軽率さを恥

じた。

「そなたは、あの男を愛しているのだろう。ここに少しでも長く、留まっついて欲しいとは思わぬのか？」

予想に反して、陛下は私に、いたわるようなまなざしを向けて、訊ねてこられた。その優しさに、私は思わず甘え、留めようとしていた言葉を、涙とともに吐き出した。

「あの人が愛する人は、邪馬台国の女王です。彼女と同じ人生を歩めるように、彼は王になろうとしているのです。どうか王になることをお認めになって、帰国させてやって下さい。」

陛下からすれば、海の向こうの小さな島国の一国の王に誰がなろうと、大きな問題ではないはず。でも、陛下のひと言で、男鹿は王として認められ、女王である壹与様と同じ位置に立てるのだ。私は陛下の顔を見上げ、重ねて懇願した。

「あの人は、女王に魏へ渡る本当の理由も告げてきていないのです。彼女が他の人のものになつてしまうその前に、どうかお願いします。」

陛下の胸に額を寄せて、私はうなだれた。このような場で、他の男の話をしている自分を、最低な女だと思った。でも妾の私には、このような場でしか、陛下にお願いする機会はないのも事実だった。

「将来への約束も、誓いもなく、愛する者を置いてきたというのか。」

しばらくして、陛下はぼそりとおっしゃった。その言葉に陛下の顔を見上げた私は、ぞくりとして息を呑んだ。その顔は先ほどまでとはうってかわり、氷のように固く、冷ややかだった

のだ。

「…気に入らんぬ。」

陛下は、無表情に天井を見つめながら、小さな声でそうつぶやかれた。

宮廷の庭の樹木が色づきはじめて頃、紅玉が青い顔をして私の部屋へ飛び込んで来た。

「奥様！男鹿様が…！男鹿様が…！」

ただならぬ彼女の様子に、書を書いていた私は、思わず筆を置いて立ち上がった。

「紅玉、落ち着いて。男鹿がどうかしたの？」

私は紅玉の肩を掴み、彼女の目を強く見つめた。そんな私を見つめ返す少女の瞳は、涙が溢れ、その口元はがたがたと震えていた。

「公休様が、男鹿様を兵達の訓練場へ連れて行かれたのです。」

「なんですすつて。」

公休（諸葛誕）様とは、司馬家の遠縁にあたる武将だ。今回の東興への侵攻を、子元様に提案されたおひとりりで、詔勅がくだされれば、真つ先に出陣されることになっている。

戦に備え、公休様の兵達が、宮廷内で鍛練に励んでいることは聞いていたが、そこに男鹿を連れ出したと聞いて、私は血の気を失った。学問好きで物腰の柔らかい彼に、武芸など無縁に思われた。そんな、どうみても武術向きでない者に、兵達の相手をさせることは、これまでも

ままにあつた。しかしそれは、その者が恐怖で逃げ惑ったり、散々に痛めつけられる様子を見て、楽しむためのものだ。おそらく、以前男鹿おがに苦汁を飲まされた子元様しげんが、彼に報復するため、公休様こうきゅうに命じられたのだらう。居ても立つてもいられず、私は紅玉こうぎよくと共に、訓練場を目指して駆け出した。

私たちが訓練場へ着くと、すでに広場を取り囲むように、人だかりが幾重にもできていた。その外側でおろおろと様子を伺う私の肩を、何者かが軽く叩いた。振り返ると、祖父の張政ちやうせいが、笑みを浮かべて立っていた。

「お前も余興を楽しみに来たか。」

「笑い事ではありませぬ！」

私が思わず声を荒げると、祖父は一瞬、驚いた顔をして押黙った。やがて祖父は、私の腕をつかむと、「道を開けろ。」と言いながら、人混みの中を突き進んで行った。私はもう一方の手で紅玉こうぎよくの腕をつかみ、引きずられるように祖父の後を付いて行った。

人混みをかき分け、最前列まで出た私の眼前に、広場の中央部に立つ男鹿おがの姿があつた。髪を小さくひとつにまとめ、兵士服を着た彼は、右手に木剣ぼっけんを持ち、その場に静かに立っていた。

「徹底的にやっつけてしまえ！」

「倭人に我々の力を思い知らせてやれ！」

広場をとりまく男達は、拳こぶしをあげ、口々に煽あおるような言葉を発した。そんな喧騒けんそうもまるで聞こえていないかのよう、男鹿おがは目を閉じて静かにたたずんでいた。

「張政殿ちやうせいももうろくされたか。あのような若造を、一国の王にしたいなど。」

鎧よろいを身に着けた中年の男が祖父の存在に気付き、そう言つて苦笑した。体格が良く、豪快な印象のその武将は、公休様こうきやうだった。

「まあ、見ておれ。」

不敵な笑みを浮かべてそう言う祖父を見て、公休様こうきやうはふんと鼻を鳴らし、広場の男鹿おがに視線を戻した。私と紅玉こうぎよくは、恐怖と不安に身を震わせ、抱き合つて広場を見つめていた。

突然、一人の兵士が、木剣ぼっけんを振り上げ、男鹿おがに襲い掛かった。私と紅玉こうぎよくが思わず目を閉じた瞬間、少し離れた場所で、重いものが地に落ちるような、鈍い音がした。静まり返った場内を不審に思い、そつと目を開けると、先ほどと変わらぬ位置に立つ男鹿おがと、その足元に腹を抱えてのたうつ兵士の姿があつた。

「…ほう。」

何が起こつたのかわからず、戸惑う私の耳に、公休様こうきやうのため息混じりの声が入ってきた。そして次の瞬間、周りの男達が再び騒ぎ出した。

「もつと強い奴を出せ！」

「まとめてかかれ！」

野次に応えるように、今度は十人ほどの兵士が、すすみ出てきた。兵達は、男鹿おがを円状に取

り囲むと、それぞれ木剣ぼっけんを構えた。その中心で男鹿おがは、ゆつくりと兵達に目を配った。その目は、今まで見た事がないほど、鋭く光っていた。彼の目の放つ力に、その場にいる誰もが息を呑み、あたりに緊迫した空気が立ちこめた。兵達に視線を一巡りさせた男鹿おがは、両手で木剣ぼっけんを握りしめ、腰をおとして構えの姿勢をとった。

「あの構え……」

そんな男鹿おがの姿を見て、公休様こうきゅうはあごに手を当て、首を傾げられた。

それは一瞬の出来事だった。背後から迫ってきた兵士が振り下ろす木剣ぼっけんを、身を屈かがめてかわした男鹿おがは、そのままの姿勢で、円陣を組む兵達の内側を、風のような早さで駆け抜けた。同時に、その手に握られた木剣ぼっけんが弧を描き、兵士らの足を次々と打ち付けた。足元をとられた兵達は、ばたばたと転倒し、足を抱えてその場でのたうった。

上半身を持ち上げた彼に、呆気にとられてしばし動きが止まっていた残りの兵士達が、一気に襲いかかって来た。次々と迫りくる攻撃を、左右に身を逸よらしてかわしたり、木剣ぼっけん同士をぶつけ合ってはね返したりしながら、男鹿おがは兵達の間をすり抜けていった。そのあまりに早い動きに付いて行けず、兵達はその姿を見失い、おろおろと周りを見回した。男鹿おがは、そんな兵士らの背後から近付き、続けざまに彼らの腰や腹、足などを木剣ぼっけんで殴打した。

そうして気が付けば、全ての兵士が彼の足元に転がり、打たれた箇所を抱えながら、痛みにも身を悶もえさせていた。

そんな様子を見て、野次を飛ばしていた男達は息を呑み、しばらく言葉を失っていた。

「こうなったら、全員でかかれ！真剣で勝負だ！」

沈黙を破り、誰かが大声でそう呼びかけ、広場を取り囲んでいた男達は、一斉に腰の刀に手をかけた。

「もう余興は終わりだ！」

その時、公休様の低く響く声が、息巻く男達を静止した。

「わからんか。真剣でその者に挑めば、お前達は間違いなく命を落とすぞ。この者は、あれだけの人数を相手にしても、相手が軽傷で済むよう、手加減するだけの余裕があるのだぞ。」

公休様の言葉に、男達は悔しそうに唇を噛み締め、刀から手を離した。それを見届けると、公休様は、今度は男鹿の方へ向き直り、彼を手で招いた。それを見て、男鹿はゆっくりと私たちの方へ近付いて来た。彼が近付くたびに私の心臓は、激しく胸を打った。そしてそれは、抱き合う紅玉の体からも感じられた。

公休様のそばで立ち止まった男鹿は、静かに肩で息をしていた。汗が滲んだ額には、髪が貼り付き、その下の目は、鋭さを保ったまま、公休様を睨むように見つめていた。

「お前のあの構え、見覚えがある。昔倭国から来ていた、牛利という男と同じ構えだ。」
公休様がそう言うと、男鹿は目を見開き、ほっと息をついた。

「私は牛利に育てられ、剣術も彼から教わりました。」

「なんと！お前は牛利の息子か？どおりで！」

「…いえ、息子では…。」

否定する彼の言葉を耳に入れようとせせず、公休様はひとり納得したように、何度も首を下に振った。聞く耳を持たない公休様の思い込みぶりに、男鹿は否定するのを諦め、表情を少し緩めてため息をついた。

「わしは昔、牛利と何度も修羅場をくぐり抜けたのだ。そうかそうか、お前は百人斬りの牛利の息子だったのか。それでは、そのへんの雑魚が束になってかかっても、敵うはずがない。」
公休様はそう言って、豪快に笑いながら、男鹿の肩に腕を回した。戸惑い、目を泳がせる男鹿の目が、私の目と合った。その瞬間、彼は困ったような表情を浮かべて苦笑した。その顔はすでに、いつも見慣れた穏やかなものに戻っていた。私とその顔にほっと息をついた時、突然場内がざわめきだした。振り返ると、背後を取り囲んでいた男達の波がふたてに分かれて道が作られ、その間を近付いて来る人影が見えた。

「…陛下。」

近付いてくる人影が皇帝であると気が付いた男達は、次々と胸の前で手を重ね、頭を下げた。陛下はすれ違いざま、驚く私の顔に一瞬目をとめ、男鹿の正面で立ち止まると、その顔を睨みつけられた。

「お前と一度話がしたい。後ほど宮殿の謁見部屋へ来い。」

男鹿は緊張した面持ちで陛下の顔を見つめ、少し間を置いてみぞおちに手を添え、深く頭を下げた。

「花蓮、そなたもだ。」

立ち去りかけた陛下は、一旦立ち止まり、振り返って私にそう言われた。戸惑いながら私が小さく頷くと、陛下は再び長衣を翻し、人波の間を去って行かれた。

謁見部屋へ招かれた私は、緊張に震えながら、陛下がいらっしやるのをじっと待っていた。この部屋は、幼い頃は何度も訪れ、陛下と共に学んだり遊んだりした場所だった。でも、妾となつた私が陛下とお逢いできるのは、基本的には陛下が私の部屋へお越しになる夜だけで、私からこの部屋へ赴いたのは、今の身分になつてからは初めてのことだった。

私の隣には、汚れを落とし、長衣に着替えた男鹿おがが、同じく緊張した面持ちで座っていた。私の事で、自分が陛下に良く思われていないことを知っている彼も、話の内容が何なのか、不安を抱えているようだった。

しばらくして、玉座の傍らの扉が、きしんだ音を立てて開き、冕べん（冠）を被つた陛下が入つていらした。その様子を見て、男鹿おがは両手を床に付き、上半身を折り畳むように頭を下げた。正面を見つめたまま、陛下は黙つて玉座に近付くと、ゆっくりと腰を降ろされた。広い室内に、陛下の冕べんに釣下る玉がぶつかり合う音だけが響き渡つた。

「お前の戦いぶりを見せてもらった。」

七色の宝玉の間からのぞく冷ややかな目が、男鹿おがを睨みつけ、男鹿おがはその言葉に一層身を屈かがめた。

「聡明で弁がたち、武術にも優れているとは、才能に恵まれた男だな。さすが張政が見込んだだけのことはある。」

そう言つて陛下は玉座から立ち上がり、男鹿のそばへ近付き、手にされていた笏で、彼のあごを持ち上げられた。顔をあげた男鹿は、上目遣いにまつすぐ陛下を見つめた。

「そのうえ、こんな美しい顔をしていながら、他の女には目もくれず、一人の女を一途に想い続けているとは。花蓮が惹かれるのも無理もない。」

私は頬が熱くなるのを感じ、床に視線を落とした。

「だが、お前を王として認めるわけにはいかぬ。」

思わず顔をあげた私が隣を見ると、微かに眉間を寄せて、陛下の顔を見上げる男鹿の姿があった。

「お前、その唯一の女に、なんの約束も誓いも告げず、ここへ来たそうではないか。」

「それは、守れるかどうかともわからない約束で、彼女を縛りたくないという、彼の優しさで……。」

男鹿の気持ちを代弁する私に、陛下はそのままの姿勢で、目線だけを向けられた。そして再び男鹿に向き直ると、さらに笏を持ち上げた。

「違うな。この者には、その女の人生を受け止める覚悟がなかったのだ。」

陛下の言葉に、男鹿の瞳が見開き、眉が一層寄せられた。

「なぜ、お前が王になって、その女と同じ立ち位置にいかねばならぬ？女王がお前と同じ場

所まで、身を落とすという選択肢もあつたはずだろう。」

陛下を見上げる男鹿^{おが}の瞳が潤み、震える口元で小さく歯が音を立てはじめた。

「この者は、自分のせいで、女王の人生が大きく変わること恐れたのだ。共に生きる約束をしなければ、たとえ王になれなくても、自分が身を引くことで、彼女の立ち位置は変わらぬからな。一人の女の人生にさえ責任を持つ勇氣のない男に、民が自分たちの生活を委ねられると思うか？」

そう言つて陛下は、身を翻し、再び玉座に腰を降ろされた。男鹿^{おが}は打ちのめされたようになだれ、肩を震わせていた。

「この者には、その女のために生きたいという奮起が感じられない。倭からの帰国者から集めた情報に寄ると、女王を庇い、瀕死の重傷を負ったことがあるそうではないか。どうせこれまで、彼女のためにいかに命を投げ出すか、そればかり考えてきたのだろう。そんな男に、愛する者を幸せにすることなどできぬ。もちろん、民衆もな。」

陛下はそう言つて立ち上がり、謁見部屋を出て行かれた。あとには、膝に置いた拳を震わせ、唇を噛み締める男鹿^{おが}と、掛ける言葉も見つからず、彼を見守るしかない私が残された。

謁見部屋を後にした私たちは、無言のまま、宮廷内の外廊を歩いていた。紅葉の見事な庭に差し掛かった時、男鹿^{おが}が立ち止まり、柵に肘を置いて身を委ねた。

「陛下のおっしやられる通りです。私は、あの方の人生を変えてしまうのが怖かった。」

私も立ち止まり、彼の隣に並んで、美しく色付いた木々を見つめた。

「以前壹与様は、王家から追放して欲しいと帝に訴えられたそうです。私と同じ人生を歩むために。」

そう言つて男鹿は掌で目元を覆つた。その指の間から、涙が伝い落ちた。

「あの方はとつくに、私とともに生きる覚悟を決めておられたのに、その頃の私は、あの方のために死ぬことばかり考えていた。」

柵に置いた腕に顔を埋めた彼は、やがて嗚咽を漏らしはじめた。見た事がない、弱々しいその背中を、私は黙つて後ろから抱きしめた。抱きしめた背中から、私の中にも彼の切なさが流れ込み、私も一緒に泣いた。

「陛下にとつて大切な命を粗末にするなつて、あなたが私に言つてくれたのよ。あなたも壹与様のために、その命を大切にしなくちゃね。」

涙混じりに私がそう言うと、彼は一層身を屈め、全身を震わせて男泣きした。

「陛下は、本当にあなたのことを愛していらつしやるのですね。」

しばらく時が過ぎ、落ちつきを取り戻した男鹿は、ゆっくりと頭を持ち上げながらそうつぶやいた。

「……え？」

私が驚いて目を丸くすると、彼は赤くなつた瞳を私に向けて、優しく微笑んだ。

「本当に人を愛したことがなければ、あのような言葉は出てこないと思います。」

その言葉に、私は衝撃を受けた。陛下の私へ対する想いも、幼い頃から共に困難を乗り越えて来たことによる、依存心のようなものだと思つていたので。

「きつといつか、そなたを皇后にする。」

だとすれば、繰り返しておつしやつていたあの言葉も、私へ対する覚悟の現れだったのだろうか。そう考えてみると確かに、皇太后様にどんなに反対されても、妨害されても、陛下はこれまで一貫してそう言い続けてきて下さった。けれどそんな言葉を、私は自分の身の可愛さから、いつも受け流してばかりいたのだ。それなら、陛下をお支えしたいと言いながら、覚悟を決めていなかったのは私のほうだ。

「そして、私などには想像の及ばない、大きな覚悟を持って、玉座に座っておられるのですね。」

そう言つて色付く木々を見上げた男鹿おがの横顔は、さつきまでより少し、大人に見えた。

第六章

敗北感

とうとう陛下は呉の要所、東興への侵攻を決意された。張緝様は最後まで反対されていたが、結局、子元様に押し切られるかたちで、朝廷内の意見がまとまったのだ。年内の出兵は短兵急ではないかと躊躇されていた陛下も、士気が高まっている間の方が勝機も高まると、最終的には判断されたのだ。

「奥様あ…。」

戦に向けて朝廷内が緊張感に包まれつつある冬の日、紅玉が青い顔をして私の部屋へやって来た。彼女は、私に向かい合ってその場にべたりとへたりこむと、両手で顔を覆い、しくしくと泣きはじめた。

「男鹿にまた何かあったの？」

紅玉がこのような様子になるのは、たいてい男鹿の身に何かよからぬことがあった場合なのだ。私は胸騒ぎを覚えながらも、努めて冷静に若い侍女に訊ねた。

「公休様が、男鹿様を今回の戦に連れて行かれるそうなのです。」

「…え…。」

私は思わず息を呑んだ。仮にも倭国からの客人である彼を、戦に同行させ、命を危険に晒すなど、常識的には考えにくかった。

「一国の王を目指すのであれば、戦を経験することも必要であろうと、子元様がおっしゃったそうです。」

やはり…。私は心の中でつぶやいた。先日、兵の相手をさせて男鹿の鼻をあかすつもりが、失敗に終わった子元様は、もはや手段を選ばなくなったのだ。もし彼が戦場で命を落としたとしても、倭の帝には、不慮の事故にあったとでも説明されるつもりなのだろう。とはいえ、さすがに子元様おひとりの判断では、倭国との関係を考え、少なからず反対する者もあるはず。おそらく、皇太后様の承認もあつてのことだろう。

「…ひどい。」

声をあげて泣き続ける紅玉の姿を見つめながら、私は唇をきつく噛んだ。

「男鹿は今どこに？」

「訓練場で、兵と共に鍛練されていると思います。」

しやくりあげながら、紅玉は涙で濡れた顔で答えた。

訓練場についた私と紅玉は、木陰に身を隠して、男鹿の姿を探した。戦が近付き、血の気が多くなっている男達の前に、女が姿を晒すのは危険を感じたからだ。私たちは寄り添いながら、木の幹にしがみつくようにして身を乗り出し、訓練場を見回した。そんな私の肩に、何者かが背後から軽く手をかけた。驚いて飛び上がった私が振り向くと、祖父がいた。

「こんなところで何をしておる。」

私たちの身を案じてか、祖父はいっぴになく厳しい表情で、私の目を見つめていた。

「男鹿が東興へ行くことになったというのは、本当なのですか？」

そう訊ねた私の目に、祖父の後ろに立つ男鹿の姿が入った。

私たちは祖父に導かれ、訓練場から少し離れた建物の陰に移動した。

「これは子元様と皇太后様の陰謀です。」

眉をひそめる私の顔を、祖父は睨みつけた。

「軽率にそのようなことを口にするでない。あの方達の耳に入ると首が飛ぶぞ。」

強い口調で言われ、私は悔しい思いを抱えながら唇を噛み締めた。

「男鹿様、本当に戦場に赴かれるのですか？」

紅玉が涙を溜めた瞳で、男鹿に訊ねかけた。兵士服に身を包んだ彼は、先ほどまで体を動かしていたらしく、額や首筋に流れる汗を晒で拭いながら、少女に真顔を向けた。

「子元様に命じられたからだけじゃない。私が王になることを目指している狗奴国は、大陸からの玄関口に位置している。国を守る者となるつもりなら、大陸の戦をこの目で見ておくことも必要だと思うんだ。」

男鹿はそう言っつて少し身を屈め、真剣な表情で、紅玉の顔を覗き込んだ。

「何が何でも私は祖国に帰らなくちゃいけない。だから、必ず生きて帰って来るよ。」

紅玉が涙顔で小さく頷くと、彼はにこつと笑い、少女の頭を優しく撫でた。そんな彼の様子に、私は微かな変化を感じた。

「おい。若いの。」

その時、野太い男の声が彼を呼んだ。振り向くと、鎧を着けた公休様が、手に大きな巻物を持って近付いて来られるのが見えた。彼に近付きながら、私と紅玉の方をちらつと見て、公休様はちつと舌を鳴らされた。

「ふん、この色男が。」

そして、巻物を両手いっぱい広げられた公休様は、それを男鹿の正面に差し出した。そこには、魏と呉の国境付近の地図が描かれていた。

「お前、なかなかの策士だそうではないか。参考までに意見を聞かせろ。今回の戦、お前ならどう攻める？」

突然のことに、男鹿は一瞬目を丸くしたが、すぐに真剣な表情に戻り、しばらく黙って地図をじつと見つめた。

「そうですね。これを見る限り、私なら兵を三体に分けます。一体は直接東興を目指し、あとの二体は、長江の上流に向かわせ、呉の援軍を阻止します。東興は水上の砦と聞いておりますので、呉に援軍が加わると、水上戦に不慣れな魏にとっては不利になりますから。」

地図上に指を滑らせ、男鹿は淡々と語った。

「ふむ。」

公休様は、男鹿の話聞きながら、何度もうなり声をあげられた。

「なるほどな。その方向で子元様に提案してみるか。後でもう少し詳しく策を練ろう。」

地図を丸め直しながら、公休様は感心したように、何度も首を上下に振られた。男鹿はやは

り少し緊張していたのか、ほっと息をついて肩を落とした。

「ところでお前、牛利の息子ではないそうではないか。」

公休様は怪訝な顔をして、責めるような視線を男鹿に向けられた。確か前にその男の話題が出た時、男鹿は否定したはずだが、公休様が聞く耳を持たなかったのだ。呆れる私と異なり、男鹿は冷静に公休様の言葉に答えた。

「私は牛利の許嫁の弟です。」

「なんと!」

突然、公休様は男鹿の肩をつかみ、顔を間近に寄せて、見開いた目で彼の瞳を見つめられた。

「ふたりは会えたのか? 彼女はあいつを待っていたのか?」

興奮気味にそう詰め寄る公休様に、男鹿は戸惑いながらも小さく頷いた。それを見て、公休様は大きくため息をつき、彼から手を離された。

「よかった。待っていてくれたのか。本当によかった。」

公休様は、少し瞳を潤ませながら、笑顔を見せられた。

「当時、呉との戦いは今より激しく、我々が命を落としかけたのは、一度や二度ではなかった。だが、奴は決して生きる事を諦めなかった。必ず帰国し、夫婦になると、許嫁に誓って来たからと言ってな。しかし、十年だぞ。よくぞ待っていてくれた。」

公休様の話を聞いているうちに、私には男鹿の表情が今にも泣きそうに変化していくように見えた。そんな彼に気付く事なく、やがて公休様は、「よかった、よかった。」と何度もつぶや

きながら、私たちから遠ざかって行かれた。男鹿は、そんな公休様の後ろ姿を、いつまでも目で追いつけていた。

「どうかしたの？」

公休様の姿が見えなくなると、私は男鹿の様子が気になって問いかけた。けれど彼がなかなか口を開かないので、祖父の方へ視線を移すと、祖父も難しい顔をして口をつぐんでいた。

「牛利は、その昔、倭国の女王が魏へ送った使者に仕える者で、かなり腕のたつ大男じゃった。」

しばらくして、祖父はゆっくりと語りはじめた。すると男鹿は、そんな祖父に半分背を向け、視線を地面に落とした。

「それゆえに呉との国境近くに派遣され、十年もの間要所を守る事を命じられたのじゃ。その男が、倭国を発つ前に将来を誓い合っていたのが、こやつ姉じゃ。」

私が男鹿の方へ目を向けると、彼はうつむいたまま、唇を噛み締めていた。

「その人を、お姉様はずっと待ち続けたのね。」

生きて帰るかもわからぬ人を、そんなに長い時間待ち続けるなんて、私には想像もできなかった。でも、一人の人を一途に想い続けるところは、男鹿に通じるものを感じていた。

「けれど、それほど強い絆で結ばれたふたりなら、今はさぞかし幸せに暮らしているのでしょうね。」

深い愛の話にあたたかい気持ちになって、頬を緩める私とは対照的に、男鹿おがの表情が固まった。

「…姉はもうこの世にはいません。」

「…え…。」

噛み締めるように吐き出された彼の言葉に、思わず私は目を見開いた。

「姉は牛利ぎゅうりの主あそじに見初められ、側女そばめになることを拒み、そのために私の家は取り壊されました。両親も姉も、その時命を落とし、牛利ぎゅうりに助け出された私は彼に育てられたのです。」

思いがけない事実に、私は言葉を失った。そんな私の袖を握りしめ、紅玉こうぎよくはぼろぼろと涙を流していた。

「あの誓いがなければ、姉は別の人生を選び、今頃幸せに暮らしていたのではないかと、牛利ぎゅうりを恨んだこともありました。」

固く瞳を閉じてそう言う彼の姿を見ながら、「ああ、だから…。」と私は心の中でつぶやいた。許嫁いいなづけとの誓いを胸に待ち続けた挙げ句、命を落とした姉を思い、きつと彼は、必要以上に約束を交わす事を恐れるようになったのだ。

「言葉で相手を縛る事はできないわ。あなたのお姉様は、そうしたいと思ったから待ち続けたのよ。」

「…。」

私の言葉に弾かれたように彼は顔をあげ、驚いたような表情を見せた。

「そして牛利も、言葉だけでお姉様の心を留めておけるとは思っていないなかつたかもしれない。でも、その誓いを心の支えに、死と隣り合わせの戦場で、必死に生き抜いたんだわ。」

しばらく呆けたように、私の話を聞いていた男鹿は、ふと私たちに背を向け、冬の雲に覆われ、ぼんやりと光を放つ太陽を見上げた。

「…くそ。かつこいいいな…。」

小さく舌打ちして、彼はそうつぶやいた。その背中中は、微かに震えているように見えた。

年が明けるのを待たずに、魏軍は挙兵した。子元様は弟である子尚様を、三体総勢約三十万の兵士を指揮する大都督に任命された。男鹿が提案していたように、公休様が率いる軍は直接東興を目指し、残りの二体は、それぞれ長江の上流にある南郡と武昌で、呉の援軍を阻止することとなった。援軍を壊滅させた二体が、東興で合流し、大軍となって呉領内に一気になだれ込むという戦略だった。

男鹿は公休様の兵と共に、東興を目指して行った。私に、先日訓練場で会って以降、彼と言葉を交わす機会はなく、軍が戦地へ出立する日も、遠くから見送ることしかできなかった。雪の降り荒ぶ中、彼は緊張した面持ちで公休様の隣に並んでいた。鈍色の兜の下から覗くその瞳は、終始鋭く戦地の方向を見つめていた。

意外にも出兵後、朝廷内は楽観的な空気に包まれていた。もともと魏軍の方が、圧倒的に兵士の数で勝っていることに加え、即位したばかりの幼帝のもとで、呉軍の結束力は晩弱であるはずとの見方が強かったのだ。そのため、宮殿内では、戦争中であることが嘘のように、穏やかな日常が続いていた。

「油断が足をすくうことにならなければよいが…。」

部屋の戸を開き、雪の降り積もる庭を見つめながら、陛下がつぶやかれた。

「呉は今存続の危機に瀕している。だからこそ、奮迅の戦いを挑んでくる可能性もあるのだ。」
しんと降り積もる雪とは対照的に、陛下の表情は険しかった。私は、脱ぎ捨てられていた長衣を携えて背後から近付き、陛下の肩にそれを掛けた。陛下は長衣に添えられた私の手を握り、ぎゅつと力を込められた。

「司馬師の態度も気になる。」

確かに、いつも緻密に戦略を練られる子元様が、今回の戦に際しては、なぜか弟の子尚様に全権を委ねておられていることが不可解だった。

「お風邪を召されます。」

陛下の背に手を添え、部屋の奥へ導く私に、陛下は笑顔を見せてくださった。でも、そのお顔は不安気に曇っていた。たとえ御身は洛陽にあっても、陛下の心は戦地の兵士らのそばに、常に寄り添っておられるのだ。私は、陛下の凍えた体と心を温めて差し上げようと、茶器に茶

を注いだ。

「そなたに頼みがある。」

腰を降ろし、ほっと息をつかれた陛下は、ふいに話題をかえられた。

「頼み？私にですか？」

茶器を手渡ししながら、私が訊ね返すと、陛下は照れくさそうな笑顔を浮かべられた。

「皇后の相手をしてやってくれぬか。最近どうも元気がないんだ。朕にはどうしてやればよいのかわからんでな。」

陛下は少し頬を赤く染め、茶を啜られた。私は陛下のお話を聞いて、今回の出陣に際し、子元様に異を唱えられた張緝様の娘である皇后様は、少し肩身の狭い思いをされているのかもしれないと思った。

「女同士のほうが話もしやすいであろう。」

皇后様は、たしかまだ十三歳。紅玉と同じ年頃のはずだった。陛下は、年の離れた若い妻の扱いに、少し困っておられる様子だった。不自然な澄まし顔で頬杖をつきながら、照れ隠しされている陛下に、私は思わずくすりと笑ってしまった。

「私でお役に立てるなら。明日早速、ご機嫌を伺いに参ります。」

翌日、私は皇后様のお部屋を訪ねた。皇后様は瞳を輝かせて、想像以上に私を歓迎してくだ

さった。

「花蓮^{フラワー}さんに来ていただけると。本当に嬉しい。」

淡い桃色の衣が似合う愛らしい少女は、そう言って満面の笑顔を浮かべられた。私たちはしばし、自己紹介をかねて、他愛のない世間話を交わした。皇后様は少女らしく、ちよつとした話題にも、目を大きく見開いて驚いたり、泣きそうな表情になったり、急にけらけらと笑いだしたりされた。そんな、めまぐるしく変わる表情を見ていると、自然と私の顔もほころんだ。

「最近お元気がない様子と、陛下が心配しておられました。」

話題が途絶えた時を見計らって、私は本題に入った。皇后様は、一瞬驚いたように口を開けられたと思うと、すぐに顔を赤らめてうつむかれた。

「…どうすれば、陛下にふさわしい女性になれるのかわからないのです。」

皇后様は耳まで真っ赤にされ、ますます顔を床に向けられた。

「私、花蓮^{フラワー}さんのように賢くもないし、大人っぽくもないし。陛下が何か悩まれている、何のお役にも立てなくて…。」

皇后様はそう言つて、うつむきながら膝の衣を握りしめられた。そのあまりにいじらしいお姿に、私の胸はきゅんと音をたてた。

「陛下を愛していらつしやるのですね。」

微笑みながらそう言う私の顔を、皇后様の今にも泣き出しそうな瞳が見つめられた。

「よくわからないけれど、ただ、陛下のお役に立ちたいんです。」

私が両手で皇后様の小さく白い手に触れると、微かに震えておられた。

「難しいお話をなさる必要はありません。皇后様のその素直なお気持ちで、陛下を癒してさしあげてください。きっと、喜ばれますよ。」

私の言葉に少し安心されたのか、皇后様はほっと息をつき、肩を落とされた。同時に気が緩まれたのか、その頬に涙がはたと流れ落ちた。

「司馬師しばしと意見を対立させた張緝ちやうしゅうの娘が妻であることで、陛下のお立場が悪くなることはないでしようか。」

目をこすりながら涙を流される皇后様に、私は掛ける言葉を失った。こんなに幼いのに、この方はご自分の立場が、陛下に悪影響を及ぼさないかと憂いておられるのだ。そう思うと、陛下の愛を裏切ってばかりの自分が恥ずかしくなり、今度は私が床に視線を落とした。

「戦に勝てば、わだかまりもなくなりますよ。」

拭いきれない不安を感じながらも、私は作り笑いを浮かべて皇后様にそうお伝えした。

数日後、私の部屋にいらした陛下のお顔は、いつもより穏やかに見えた。

「皇后が、そなたと会ってから、よく笑うようになった。」

そう言って陛下は、嬉しそうに微笑まれた。

「あの無垢な笑顔に癒される。」

可愛くて仕方がないという様子の陛下に、私はほっと胸を撫で下ろした。長年おそばについていながら、私は陛下のこんな幸せそうな顔を見た事がなかった。つまりこれまで、私は陛下のお気持ちを癒して差し上げた事など、一度もなかったのだろう。陛下にふさわしくないのは、きつと私のほうだ。そんな事を考え、表情を曇らせた私に気付かれたのか、陛下は肩を優しく包み込んでくださった。

「そなたは、朕にとつて戦友のようなものだ。そなたがいなければ、朕は今日まで生きてこられなかったと思う。これからもずっとそばにいてくれ。」

そう言つて重ねられた唇は、これまでで一番、甘く優しくかった。けれど同時に、なぜか陛下が少し遠くに感じられた。

魏の軍が呉侵攻に出立してから半月ほど経つた頃、信じられない知らせが朝廷内を駆け巡つた。東興へ派遣された公休様の率いる軍が、呉によつて壊滅状態となり、長江の上流へ向かつていた二体も侵攻を諦め、陣営を焼き払つて撤退したというのだ。詳しい状況はまだわからなかつたが、早急の出陣に反対されていた張緝様は、ほらみたことかと、早速子元様の責任を追求し始められた。そうして再び、朝廷内には不穏な空気が漂いはじめた。

東興での戦いでは、数万の兵士が命を落とすし、二人の武将が敵に討ち取られたとの伝聞があつた。公休様の無事は伝えられたが、私たちに、武将でもない男鹿の生死を知る術はなかつた。

「きつと大丈夫よ。彼は必ず帰って来ると言っていたのだから。」

魏の敗北を耳にしてから、泣き通しの紅玉をなぐさめながらも、私の心は不安でいっぱいだった。

何の情報も得られぬまま、さらにひと月あまりが過ぎた頃、東興から公休様の軍がようやく帰還した。宮廷内を列を成して歩く兵士らの顔は、出発したときとは別人のように生気を失い、生還者は約半数ほどしかなかった。そして列の後半になるほど、負傷者や病人が、仲間の兵に支えられながら歩く姿が目立った。

重く暗い、まるで死者の行列のような兵士の群れに目を配り、私と紅玉は男鹿の姿を探した。

「男鹿様！」

紅玉が最後尾近くで、負傷した兵士の肩を抱えて歩く彼の姿を見つけ、叫び声をあげた。少し頬がこけ、目を黒ずませた男鹿は、他の兵士同様、力なく足を引きずるように歩いていった。紅玉の声に気が付いた彼は、弱々しい目を私たちに向けて、無表情のまま小さく頭を下げた。

兵達が帰還して、時が経つにつれ、戦の全容が明らかになってきた。

呉の兵が、険しい山岳地帯の道を使って東興を目指しているとの情報を得た魏軍は、敵よりも先に現地に到着し、戦いに有利な場所を占拠できるとふんだ。実際、先に東興に着いた魏軍は、岸から河の上に建つ砦に向かって、小舟を繋げて浮き島を作り、攻撃の準備を整えた。と

ころが、敵に先手をうてた事で、勝利を確信した魏軍は、厳しい寒さの中、体を温めようと、岸辺に張った陣で酒を酌み交わしはじめたのだ。

しかしその頃、敵に遅れをとれば不利になると懸念した呉の武将丁奉が、少数の兵を従えて、最短距離で東興に向かっていたのだ。そんなことを夢にも思わず、魏の兵は完全に油断し、いつしか宴が始まっていた。そこに丁奉率いる約三千の兵が、水上から奇襲をしかけて来たのだ。しかし、酔いがまわり、判断能力を失った魏の兵らは、少数で軽装の敵を見て、相手にならぬとあざ笑った。そんな中、信じられない事に丁奉の兵は、船から真冬の河へ飛び込み、魏が陣を張る岸へ泳いで向かって来たのだという。

「この寒いのに、川に飛び込むとは、自殺行為だな。」

魏の兵士らは、はじめそう言い、笑って傍観していたという。しかしやがて、ひとり、ふたりと敵が岸に上がりはじめ、ようやく危機を感じた彼らは、慌てて刀を抜きだした。しかし、時既に遅しだった。すっかり酔いのまわっていた魏兵たちは、足元がふらつき、まともに戦うこともできず逃げ惑い、呉兵は彼らの背中を次々と斬り捨てていった。陸で逃げ場を失った者は、難を逃れようと、浮き島に飛び移った。だがその頃には、後続の呉の兵が到着しており、船同士をつなぐ綱を切断し、浮き島を破壊していたのだ。連結させることで安定していた船は、大きくぐらつき、水上戦に不慣れな魏兵は、次々と川へ落ち、酒を飲んでいたこともあり、水死者が続出した。

陛下が懸念されていた通り、後がない呉軍の決死の攻撃に対し、油断しきっていた魏軍は完

敗したのだ。

やっとの思いで生きながらえた者たちを、今度は病が襲った。極寒の中、水につかった兵士らは、次々と高熱に倒れたのだ。だが、体を休めるあたたかい場所も、食べ物もない状態で、多くの者が力つき、命をおとしていったという。

こうして、なんとか無事洛陽へ帰り着いた時には、生存者は約半数となっていたのだ。

兵が帰還してしばらくして、私は紅玉を連れて、男鹿の屋敷を訪れた。彼の居所を侍従に聞くと、北の池ではないかと言われ、私たちは夏の日に蓮を愛でた池へと向かった。

冬の池はすっかり様変わりし、そこには寒々しい景色が広がっていた。ひからびた蓮の茎や葉が折れるように首をもたげ、一面褐色に染まった池に、夏に溢れていた瑞々しい命の息吹は、いつさい感じられなかった。

そんな池の縁に、背を向けてたたずむ男鹿の姿を見つけ、私たちはそつと近付いて行った。気配を感じて振り返った彼は、私たちに向かって力なく微笑んだ。帰還した当初よりは、幾分か顔色は良くなっていたが、その表情は重く沈んだままだった。

「…私は結局、何もできませんでした。」

そうつぶやいて、彼は焼け野原のようにも見える、荒涼とした水面に視線を戻した。

「あなたは、兵士らに酒を控えるよう訴えたのでしょうか？」

私は祖父を通して公休様こうきゅうさまから、戦場での彼の様子を聞いていた。気を緩め、酒盛りを始めた兵士らに危機を感じた彼は、陣地内を駆け巡り、深呑みするなど訴えたという。けれど、異国の若者の言葉に耳をかす者は、誰一人いなかったらしい。

呉の兵が上陸してからは、逃げ惑うばかりの味方の中、ひとり、刀を手に敵に向かっていったとも聞いた。しかし、いくら彼が人並み以上に剣術に優れていたとしても、万単位の兵士らが入り乱れる中、できることはしれている。結局、我が身と、その周辺の者を守るだけで精一杯だったのだろう。

「熱に侵された兵士らを、治療してまわってくれたとも聞いているわ。」
慰めるように言う私の言葉に、彼はうつむいて、大きく左右に首を振った。

「何の手も尽くせぬまま、多くの者が死んでいきました。帰れぬ故郷を偲びながら…。」
そう言っただけは、その場にうずくまり、膝の上で組んだ腕に顔を埋めた。

そんな男鹿おがの姿を見て、私は、今回しげん子元様が彼を戦場に送られたのは、この無力感を味あわせるためだったのかもしれないと思った。ふとその瞬間、私は子元しげん様が今回の戦に敗れることを、わかっておられたような気がした。けれど、いくらなんでも、みすみす数万の兵の命が失われるようなことをされる訳がないと、自分自身に言い聞かせた。しかし、私のその推測は、恐ろしい事に、思い過ぎではなかったのだ。

第七章

残酷な陰謀

東興の戦い以降、子元様（司馬師）と敬仲様（張緝）の対立は、一層激しさを増した。これまで皇太后様の後ろ楯により、朝廷内で幅をきかせてきた子元様であったが、今回の戦いに敗れたことで、その立場が大きく揺らぐ結果となった。そして、これを契機と敬仲様は子元様へ強く責任を追求され始めたのだ。皇后様の父でありながら、これまで劣勢であった敬仲様の反撃は、容赦のないもので、子元様の失脚の日も近いのではとの噂まで朝廷内に飛び交った。そして、とうとうある日、陛下の前で、二者が顔を揃え、今回の戦いの責任の所在が追求されることとなった。

その日私は、同じ宮殿内の皇后様のお部屋にいた。皇后様から、審判がくだされるまで一緒に過ごして欲しいと直々にお願ひされたのだ。

「陛下は、ご無事でしょうか……」

震える手で私の腕を強く掴みながら、皇后様は不安気に問いかけてこられた。皇后様の心配は、父である敬仲様ではなく、陛下に向けられていた。

「父は、司馬師の提案を受け入れられた陛下をも責めるつもりです」

涙を溜められる皇后様の肩を、私は引き寄せ、強く抱きしめた。皇后様は、幼いなりに父である敬仲様の思惑を肌で感じておられるのだ。敬仲様は、子元様を失脚させるだけでなく、今回の負け戦への出兵を決断された陛下の責任も追求し、それを盾に陛下の後見人となって、権力を欲しいままにされるおつもりなのだ。皇后様は陛下の身を案じ、胸に大きな不安を抱え、

耐えきれず私を呼ばれたのだ。

突然、部屋の外から人々の叫び声が響いた。と、同時に、部屋の前の廊下を、使用人たちが何かから逃げるように駆け抜けて行くのが見えた。

私は皇后様に、その場を離れぬよう伝えて立ち上がると、戸口から外を見渡した。すると、同じ並びにある陛下のお部屋の方から、唸るような声と、重い物を倒すような激しい物音が響き渡っているようだった。

逃げ惑う人々の波に逆らって、私は壁を手で這うようにして音のする方へと近付いていった。やはりその物音は、陛下のお部屋から聞こえてくるようだった。恐る恐る、開け放たれた戸口から部屋の中をのぞき、私は驚きのあまり、その場に凍り付いた。そこには刀を振り回し、片っ端から室内の調度品に斬りつけておられる陛下のお姿があったのだ。天幕は裂け、室内に飾られていた年代ものの壺は砕かれ、床の上に無惨に散らばっていた。切り裂かれた寝具から飛び出した羽毛が、宙を舞う中、なおも吠えるような声をあげながら、陛下は刀を上下左右に振り回し、柱や家具に斬りつけておられた。

「陛下！」

戸口から私が呼びかけると、陛下の動きが止まり、狂気を孕んだような瞳が私を捕えた。乱れた髪の間からのぞくその目には涙があふれ、頬を濡らしていた。

そして次の瞬間、刀を片手に握りしめた陛下は、血走った目を私に向けたまま、こちらに近

付いてこられた。その恐ろしく悲し気な形相に、動けなくなった私のそばまでこられた陛下は、強く私の右手首を掴まれた。

「来い！」

そう言つて陛下は、私を引きずるように外廊を早足で歩き始められた。そんな私たちの姿を、役人や使用人が遠巻きに見ていた。しかし、尋常でない陛下のご様子に、誰も制止するどころか、声さえ掛けることができないようだった。

そんな周りの視線などまるで目に入っていないご様子の陛下は、そのままずんずんと歩みをすすめ、私の部屋の前まで来ると、室内に私の体を突き飛ばされた。横滑りするように床に伏した私に近付くと、陛下は刀を力一杯振り下ろし、床に突き立てられた。そしてそのまま私の上へ乗りかかると、私の衣の襟元を引き裂くように大きく開かれた。

「すまなかつた。^{フアイレン}花蓮」

しばらくして落ち着きを取り戻された陛下は、そう言つて横たわる私の首元に顔を埋められた。

あのあと、私は陛下に乱暴に抱かれた。けれど、このようなことは初めてではなかったの、私は逆らうこと無く、陛下に身を委ねた。ただ、このお方の悲しみを受け入れて差し上げたい。そう思い、痛みにも耐えた。

「すまない……」

身を震わせ、何度も繰り返す陛下の髪を撫で、私は首を小さく左右に振った。「お話ください。何がこれほどまでにあなた様を苦しめたのですか？」

私の言葉に、陛下は伏せていた顔をあげ、私の瞳を見つめられた。そして、大きくため息をつかれるとゆつくりと起き上がり、壁際にもたれかかるように座られた。そして、ぽつりぽつりと、今日あつた出来事をお話され始めたのだった。

陛下が謁見部屋に入られた時、既に敬仲（張緝）様と子元様、そして子元様の弟で今回の戦で大都督を務められた子尚様（司馬昭）がいらしたという。そして彼らの背後には、公休様（諸葛誕）をはじめ、各隊を率いた武将たちが膝を折り、控えていた。部屋の両脇に大臣たちが居並ぶ中、陛下が玉座につかれるやいなや、口火を切ったのは敬仲様だったという。

「陛下、どうぞ司馬師（子元）に嚴重なる処分を。呉相手に十万もの兵を失ったのは、準備不足にも関わらず、出兵を急いだこの者の責任です」

敬仲様は、必要以上に大きな声を張り上げて、そう陛下に進言されたという。それから敬仲様は、こうこうとご自分の正当性と、子元様の無能さを語り始められた。時期早々であるとの自分の忠告を無視し、戦を急いだこと。弟の子尚様に全権を委ね、己の役目を怠ったこと。

今回の戦を提言しながら、深酒に溺れ、多くの兵を失って帰還した公休様は、血の気を失つ

た表情で、終始唇を噛み締めておられたようだ。周りの大臣たちも、何度も頷き、その場は敬仲様の独壇場と化していたという。

「司馬師よ。お前の言い分も聞こう」

敬仲様のお話を押し黙って聞いている子元様に、陛下はそうお訊ねになった。結果的に子元様の意見に同意された陛下は、この時、少しでも今回の戦を正当化できるような答えを求めておられたに違いない。

「少なくとも、東興で十万もの兵を失った諸葛誕（公休）の首は、はねねばなりませんまい」

子元様の答えを待たず、敬仲様がそうおっしゃり、公休様は一層顔を青くして身を固められた。

「いえ。私が張緝殿の諫言を聞き入れなかったことで、このような事態を招いたのです。すべては私の過失。諸将には何の罪もございません」

間もなく、ずっと何かを考え込んでおられる様子であった子元様が、落ち着いた口調でそうおっしゃった。その言葉に、公休様をはじめとする各武將は、一斉に驚きの表情を彼に向けた。

「まずは、総責任者であった我が弟、司馬昭（子尚）の官位を返上させましよう。もちろん、私自身もどのような処分もお受けする覚悟でございます」

神妙な様子で子元様がそうおっしゃると、にわかにはその場はざわついたという。

「將軍様に責任はございません！ 我々が相手を見あまったのが敗因でございます！」

「そうです。酒の欲に溺れ、統制を失ったのは我らの心の弱さゆえ！」

武將たちは、自分たちの罪を被るかのような発言をされた子元様に恩を感じ、次々に陛下へそう訴えかけられた。すると、そんな武將たちのほうに向き直り、今度は子元様が彼らを制止するように強い口調でおっしゃった。

「お前たちは黙っておれ。弟の能力を過信し、監督を怠った私が愚かであったのだ。司馬昭さえしつかりとしておれば、お前たちも気を緩めることもなかったであろう」

互いに底い合う彼らの姿に、大臣たちの中にも、同情のような念が芽生えはじめ、いつしか、その場の流れは、子元様を擁護する方へと変化していった。そんな空気を徐々に感じ、張縉様は言葉を失い、悔し気にきつく唇を噛み締められていかれたという。

結局、大都督であった子尚様一人が官職を剥奪されることで、今回の件は片付けられた。寸でのところで首が繋がった武將たちは、改めて子元様に対し、その場で絶対の忠誠を誓ったという。

「……美しい主従愛のお話のように伺えますが……?」

事の次第を聞き終えた私は、首を傾げて陛下に訊ねかけた。確かに一人で責任をとる形となった子尚様はお気の毒だけれど、誰も首をはねられることなく、私には極めて穏便にことが片付いたように感じられたのだ。とてもこの出来事が、先ほどの陛下の激高を招いたとは思えなかった。

「のちに聞いた話に寄ると、諸葛誕の陣に酒を送ったのは、司馬師であつたというのだ」

「……」

「司馬師は、これまで幾度も諸葛誕と共に戦に赴いている。諸葛誕が酒の誘惑に弱いことも熟知していたのだ」

「……まさか」

恐ろしい想像が脳裏をかすめ、私は思わず身震いした。

「そして、司馬師は司馬昭と意見を違わせ、弟を煙たがっていたらしい」

あまりの恐ろしさに、私は陛下の胸に頬を寄せるようにしてしがみついた。そんな私の肩を抱き寄せた陛下の手にも力がこもっていた。

「司馬師は、最初からこの戦に負けるつもりだったのだ。そのために東興の陣に大量の酒を送ったのだ。戦に負けることで目障りな弟を失脚させ、同時に武将たちに恩を売って信頼を得るために」

私は思わず声にならない声をあげ、口元を手で覆った。そんな私の肩を抱く陛下の手にも、一層力が入った。

「己の権力を絶対的なものにするため、やつは十万もの兵を見殺しにしたのだ」

「……」

「そのような企みがあるとも知らず、朕は……!」

私は立ち上がって、陛下の顔を自分の胸に押し付け、強く抱きしめた。私の背の衣を握り

しめる陛下の手が震えていた。私は陛下の髪に頬を寄せて涙を流した。

「……なんてひどい……」

洛陽こくやうにいなながらも、兵らの無事を毎日祈り続けておられた陛下にとって、あまりに惨い仕打ちだった。知らなかったこととはいえ、子元様しげんの意見を受け入れ、決断を下されたことによつて、十万もの兵が苦しみ、命を落としたと聞いては、とても平常心ではいられまい。どんな言葉なら今の陛下を癒せるのか、私にはわからなかった。ただ、己の体を投げ出して、全身で陛下の悲しみと怒りを受け止めることしかできなかつたのだ。

つらい現実を忘れるかのように、陛下と私は幾度も愛し合った。やがて気を失うように眠りにつかれた陛下を残し、私はひとり部屋を出た。

いつしかすつかり陽は暮れ、月明かりを頼りにあてもなく歩いているうちに、私は何かに引き寄せられるように、男鹿おがの屋敷近くの北の池まで来ていた。

陛下の怒りと悲しみを受け止めて重くなつた心の中身を、無性にどこかで吐き出したかった。そう思うと、なぜか無性に男鹿おがに会いたくなつたのだ。夜の池に彼が現れるはずはないと思いつつも、どこかで期待していた私は、ひとけのない池の端にたたずみ、大きくため息をついた。相変わらず冬の池は荒涼とし、墨のような水面に映る満月だけが、青白い光を放つて

いた。

「花蓮？」

不意に背後から忘れようのない声が私の名を呼んだ。振り向くと私の目に、月明かりに光を放つ、涼し気な瞳が飛び込んできた。

「何かあったのですか？ こんな時間にひとりきりで……」

心配そうに私を見つめる男鹿おがの顔を見ていると、私はたまらなくなつて、彼の胸に飛び込み、陛下より細いその体を強く抱きしめた。と同時に、抑えていた感情と涙が、私の中から一気に溢れ出した。

「泣いていてはわからない。何かあったのか話してください」

しばらく黙って胸を貸してくれていた彼は、そう言つて私の両肩に手を置き、少し体を離すと、私の顔を覗き込むようにして問いかけた。体が離れた瞬間、襟の開いた衣装で露になった私の胸元を月明かりが照らした。そこにあるものを見つけた私は、素早く彼に背を向け、両手で襟を寄せてきつく握りしめた。

「花蓮？」

「近付かないで！」

私は衣を掴んだ拳を胸に押しあて、彼を拒絶するようにそう叫んだ。その拳の下の肌には、陛下が残された唇の痕が残っていたのだ。それを彼には絶対に見られたくなかつた。

「私は……汚れてるから……」

私は泣きながら首をもたげ、小さな声でつぶやいた。背を向けていても、彼の視線が私に注がれていることは肌で感じていた。でも、その視線を感じるほどに、胸の痕を見透かされているような気がして、いたたまれなくなった。一層、胸元を見られまいと、背を丸める私の体を、細い腕が背後から抱きすくめた。

「……あなたは、汚れてなどいない」

耳元で愛しい人の声が、絞り出すようにそうささやいた。

「やめてよ。愛してなどいないくせに……!」

私は必死に抗って、彼の腕から抜け出そうとしてみたけれど、細くても鍛えられた男の腕をほどくことは不可能だった。

「愛じゃないと思う。……でも、こんなに心をかき乱された人は初めてだ」

耳元にかかる彼の息が熱っぽくて、全身から力が抜け、意識をしつかり保っていなければ、その場に崩れ落ちてしまいうさうだった。

「やめてよ……」

力なく何度もつぶやく私の体を、彼はいつまでも強く抱きしめ続けていた。